

# 長崎坊田遺跡

福岡県筑後市大字長崎所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第23集

1999

筑後市教育委員会

なが さき ほう た  
長 崎 坊 田 遺 跡

福岡県筑後市大字長崎所在遺跡の調査



1999

筑後市教育委員会

## 序

筑後市大字長崎地区の一带は、過去の分布調査によって縄文から弥生時代の遺跡や平安時代の寺院跡などが点在していることが確認されていました。これに加え、近年の発掘調査で更に多くの遺跡が分布していることが明らかになってきました。

今回、ここに報告します長崎坊田遺跡はその中の一つで、平成3年度に実施された工場建築に伴う発掘調査の記録であります。調査の結果、中世の館を巡る堀などが確認され、多くの遺物が出土しました。こうした、成果を挙げることができましたのも、ひとえに連日発掘調査に参加されました作業員をはじめ、関係者の方々のご協力の賜とっております。

最後に、本書が文化財保護の一助として広く活用していただければ幸いです。

平成11年3月

筑後市教育委員会  
教育長 牟田口和良

## 例 言

- 1.本書は工場建築に伴い、株式会社大建の委託を受けて筑後市教育委員会が平成3年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2.遺構の実測は永見秀徳、小林勇作、遺構の写真撮影は小林が担当し、調査区全景の空中写真は(有)空中写真企画、遺構全体図は写測エンジニアリング株式会社に委託した。
- 3.遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用したため、本書に示される方位はすべてG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度などは、これを基準としたものである。
- 4.遺物の実測及び図版の浄書は平塚あけみ、江藤玲子、遺物の写真撮影は小林が行った。
- 5.本書に使用した遺構表示は下記の略号による。  
SA—楯列      SB—掘立柱建物      SD—溝      SK—土塙      SP—ピット      SX—不明遺構
- 6.本書の執筆・編集は小林が担当した。

## 目 次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
(1) はじめに	4
(2) 遺 構	5
(3) 出土遺物	14
IV. 総 括	39

## I. 調査経過と組織

今回報告する長崎坊田遺跡は、福岡県筑後市大字長崎に位置する。この地区は、古くから米や麦を中心とした稲作農耕が盛んに行われてきた場所であるが、近年は農業経営が多様化し、ハウスでの園芸や栽培といった施設園芸が導入されるようになり、周囲一帯を含むは場整備が大々的に実施されている。

こうした状況の中、一時は周辺の宅地開発も進み、これに絡む発掘調査が増加した。長崎坊田遺跡はこういった開発の波を受けて実施された緊急発掘調査である。

発掘調査に至るまでの経過は、当初、株式会社大建から開発予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会に照会があり、これにより開発関係者との協議を重ね、遺跡の確認調査を実施した。確認調査の結果をもとに更に協議を行い、開発面積6,511m<sup>2</sup>のうち掘削の及ぶ1,250m<sup>2</sup>を発掘調査の対象とし、実施することになった。

発掘調査は、平成3年9月27日～同年11月30日まで実施し、調査最終日に現地説明会を行った。図面や写真等の整理作業については平成4年3月31日まで筑後市郷土資料館内において行い、報告書作成については、随時、文化財整理室で行った。

### 調査組織

#### 1) 発掘調査並びに整理作業（平成3年度）

総括	教育長	森田 基之
	教育部長	橋本 益夫
庶務	社会教育課長	延 文雄
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	永見 秀徳
		小林 勇作
		(嘱託：調査担当)

#### 2) 報告書作成（平成10年度）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川 雅晴
庶務	社会教育課長	山口 逸郎
	社会教育係長	田中 清通
	社会教育係	永見 秀徳
		小林 勇作 (担当)
		田中 剛
		上村 英士
		柴田 剛 (嘱託)
		立石 真二 (〆)

#### 3) 発掘調査作業員

地元有志

#### 4) 整理作業参加者（順不同、敬称略）

平塚あけみ、江藤 玲子（整理補助員）野間口靖子、  
江崎 千鶴、馬場 敦子、野口 晴香、湯川 琴美

なお、調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜り、記して感謝の意を表したい。

佐々木隆彦（福岡県教育庁）、狭川真一、山村信榮、中島恒次郎（太宰府市教育委員会）、富永直樹、  
白木守（久留米市教育委員会）、大塚恵治（八女市教育委員会）

## II. 位置と環境

長崎坊田遺跡は筑後市の中央部、やや西よりの扇状地性低地上に位置し、標高7.3m前後を測る。

当遺跡が所在する大字長崎は、筑後市を西流する山ノ井川と花宗川に挟まれた長細い土地であることから付けられた地名とされており、古くから米や麦、い草の水田農業が盛んに行われている地域である。近年では耕地の集団化や区画整理、農道の整備、用排水路の分離など営農体系を確立させるため、周辺一帯のは場整備が実施され、農業の形態が一変しつつある。

さて、こうした状況のなか地域の開発も進み、これにより発掘調査が増加傾向にあった。地域一帯には過去の分布調査によって多くの遺跡が点在していたことが知られていて、徐々にではあるが、近年の発掘調査で遺跡の存在が明らかになってきた。

筑後市教育委員会が実施した筑後市内での発掘調査は、1962年に岩崎氏（当時、福岡高等学校教諭）らの努力によって裏山遺跡が調査されたのを皮切りに今年で37年目を迎え、筑後市内での発掘調査件数は1998年3月までで、133現場も調査が行われてきた。

以下のTab.1・2は、筑後市内で実施された発掘調査の一覧表であり、調査地点位置図は付図①に示す。

遺跡No.	旧遺跡名	新遺跡名	所在地	調査期	遺跡の時代・性格(特記事項)	文献No.
1	石山古墳	石山古墳	筑後市大字新津字石山	-	前方後円墳(国指定史跡)	
2	裏山遺跡	裏山遺跡(第1次調査)	● 上北高字裏山	1962年~1963年	縄文・弥生・巻土(巻土区画など)	1
3	長塚遺跡	長塚遺跡	● 上北高字長塚	1969年04月	弥生~古墳(巻土区画など)	2
4	塚下寺古墳	塚下寺古墳	● 西平野字塚下	1983年01月	円墳	3
5	蔵敷野原古墳群	蔵敷野原古墳群(第1次調査)	● 蔵敷野原古墳群	1985年04月	弥生・古墳(巻土区画)	4
6	井原口遺跡	井原口遺跡	● 上北高字井原口	1985年06月	弥生・巻土(巻土区画など)	4
7	新津中ノ玉遺跡	新津中ノ玉遺跡(第1次調査)	● 新津中ノ玉	1985年12月	弥生・巻土(巻土区画など)	4
8	田塚遺跡	田塚遺跡	● 北平田字田塚	1987年11月~12月	弥生~古墳(巻土区画など)	5
9	蔵敷野原遺跡	蔵敷野原遺跡(第1次調査)	● 蔵敷野原	1988年03月~06月	縄文(土器・土器・弥生(巻土区画など))	6
10	高江遺跡	高江遺跡	● 高江字高江	1989年01月~03月	弥生~古墳(巻土区画など)	7
11	矢野遺跡	矢野遺跡	● 新津字矢野	1989年07月~08月	古墳(巻土区画・土器区画)	9
12	上北高遺跡	上北高遺跡	● 上北高字前田	1989年07月~09月	中世(巻土区画など)	7
13	下北高遺跡	下北高遺跡	● 下北高字下北	1989年09月~11月	弥生(巻土区画など)	7
14	蔵敷野原遺跡(第2次調査)	蔵敷野原遺跡(第2次調査)	● 蔵敷野原	1989年06月~11月	弥生・巻土(巻土区画など)	4
15	裏山遺跡(第2次調査)	裏山遺跡(第2次調査)	● 上北高字裏山	1990年05月	縄文・弥生・巻土(巻土区画など)	1
16	壱字遺跡	壱字遺跡	● 西平野字壱字	1990年06月~08月	中世(弥生)	7
17	蔵敷野原遺跡	蔵敷野原遺跡	● 蔵敷野原	1990年07月~12月	弥生(巻土区画など)	4
18	矢野遺跡	新津字遺跡	● 新津字壱字	1990年09月~1991年01月	中世(巻土区画など)	7
19	梅島遺跡(第1次調査)	梅島遺跡(第1次調査)	● 常津字梅島	1990年12月~1991年01月	弥生(巻土区画など)	8
20	岩大塚中流遺跡(第1次調査)	岩大塚中流遺跡(第1次調査)	● 岩大塚中流	1991年06月~08月	弥生・巻土(巻土区画など)	4
21	平塚遺跡	平塚遺跡	● 上北高字平塚	1991年07月~12月	弥生~古墳(巻土区画など)	4
22	壱字遺跡	壱字遺跡	● 壱字壱字	1991年09月~11月	縄文・中世(弥生)	7
23	久草遺跡	久草遺跡	● 下北高字久草	1991年09月~1992年02月	弥生(巻土区画など)	7
24	梅島遺跡(第2次調査)	梅島遺跡(第2次調査)	● 常津字梅島	1991年12月~1992年04月	弥生(巻土区画など)	4
25	下北高遺跡	下北高遺跡	● 下北高字下北	1992年02月	中世(弥生)	7
26	久草野ノ玉遺跡	久草野ノ玉遺跡	● 久草野ノ玉	1992年04月~05月	旧石器(旧石器時代)	20
27	若菜遺跡	若菜遺跡	● 若菜字若菜	1992年04月~1993年06月	縄文・中世(巻土区画など)	7
28	高江口遺跡	高江口遺跡	● 高江口	1992年05月~06月	中世(弥生)	21
29	梅島遺跡	梅島遺跡	● 下北高字梅島	1992年07月~12月	弥生・巻土(巻土区画など)・中世(弥生)	10
30	上北高遺跡	上北高遺跡	● 上北高字前田	1992年09月	弥生(巻土区画など)	7
31	水田川遺跡(第1次調査)	水田川遺跡(第1次調査)	● 水田川	1992年10月	弥生(巻土区画など)	14
32	西ノ所古河ノ所遺跡	西ノ所古河ノ所遺跡	● 西ノ所古河ノ所	1992年12月~1993年02月	弥生(巻土区画など)	11
33	梅田原遺跡(第1次調査)	梅田原遺跡(第1次調査)	● 梅田原	1993年04月~09月	弥生・古墳(巻土区画など)	12
34	新津丸田遺跡	新津丸田遺跡	● 新津丸田	1993年06月~10月	縄文(巻土区画)	12
35	梅田原遺跡(第2次調査)	梅田原遺跡(第2次調査)	● 梅田原	1993年08月~11月	中世(弥生)	12
36	久草野ノ玉遺跡	久草野ノ玉遺跡	● 久草野ノ玉	1993年09月~11月	古墳(巻土区画)	14
37	梅田原遺跡	梅田原遺跡	● 梅田原	1993年10月~11月	中世(弥生)	12
38	井原野中野遺跡	井原野中野遺跡	● 井原野中野	1993年11月	中世(弥生)	14
39	梅田原遺跡(第3次調査)	梅田原遺跡(第3次調査)	● 梅田原	1993年12月~1994年03月	古墳(巻土区画)	12
40	若菜立遺跡	若菜立遺跡	● 若菜立	1994年04月~07月	中世(弥生)	17
41	梅田原遺跡(第2次調査)	梅田原遺跡(第2次調査)	● 梅田原	1994年04月~07月	中世(弥生)	12
42	蔵敷野原遺跡	蔵敷野原遺跡	● 蔵敷野原	1994年05月~06月	弥生(巻土区画)	15
43	水田川遺跡(第2次調査)	水田川遺跡(第2次調査)	● 水田川	1994年06月~07月	中世(弥生)	14
44	久草野ノ玉遺跡	久草野ノ玉遺跡	● 久草野ノ玉	1994年06月~11月	中世(弥生)	14
45	沢田川遺跡(第1次調査)	沢田川遺跡(第1次調査)	● 沢田川	1994年07月~08月	弥生(巻土区画)	18
46	水田川遺跡(第2次調査)	水田川遺跡(第2次調査)	● 水田川	1994年07月~08月	弥生(巻土区画)	18
47	若菜田中流遺跡	若菜田中流遺跡	● 若菜田中流	1994年07月~10月	弥生(巻土区画)	17
48	若菜野ノ玉遺跡	若菜野ノ玉遺跡	● 若菜野ノ玉	1994年08月~10月	弥生(巻土区画)	17
49	若菜野ノ玉遺跡(第2次調査)	若菜野ノ玉遺跡(第2次調査)	● 若菜野ノ玉	1994年08月~11月	中世(弥生)	17
50	梅田原遺跡(第3次調査)	梅田原遺跡(第3次調査)	● 梅田原	1994年09月~10月	弥生~古墳(巻土区画)	12

Tab.1 筑後市内埋蔵文化財発掘調査一覧表①



### Ⅲ. 調査の概要

#### (1) はじめに

当遺跡は開発予定地内のはほぼ全域に存在するが、協議の結果、工事によって掘削・削平の及ぶ部分を発掘調査の対象とし、残った部分については遺跡保存の措置をとることとした。これにより、調査区は東側と西側に分かれたことから、便宜上東側調査区を「調査区A」、西側調査区を「調査区B」と称した。

調査は、対象となる部分を重機で徐々に掘下げていったところ、表土を15cm程度除去すると、調査区Aの遺構面では乳灰色粘土の地山が主体で、調査区Bの遺構面での地山は暗茶褐色及び暗黄褐色粘質土で形成されていた。

調査区内の遺構面からは主に掘立柱建物や溝、土壌といった遺構が検出された。

以下、各遺構について概略する。

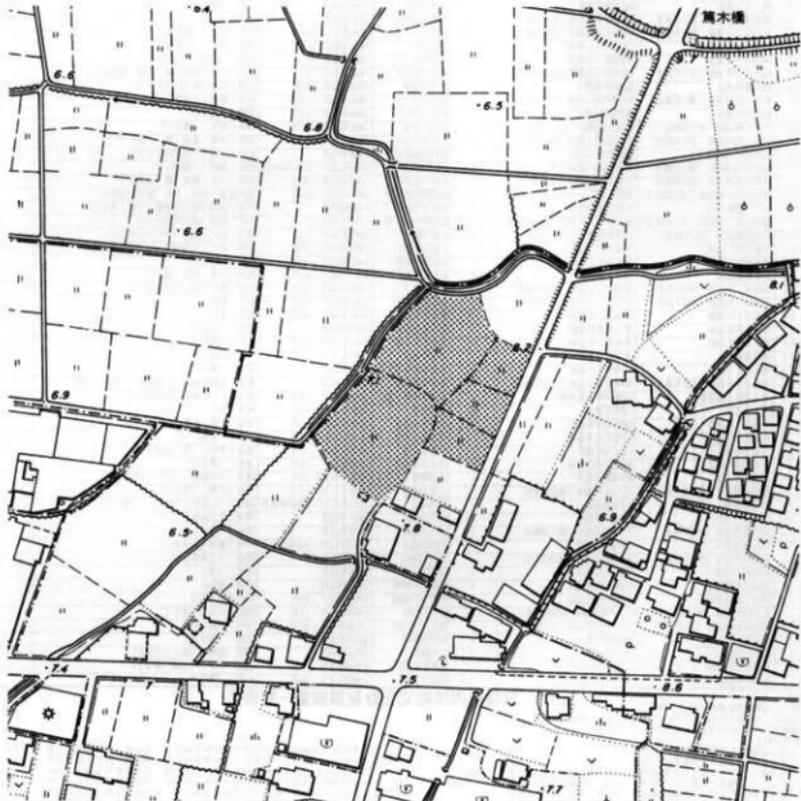


Fig.1 長崎坊田遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

## (2) 遺構

### 調査区A (付図②・Pla.2)

当調査区の東端は丘陵の落ち込み部にあたり、遺構検出面の標高は平均で7.20mを測る。

#### 溝

##### SD001 (Fig.2・3)

南北方向の溝で、溝の南側は12.3mを検出したところで終息し、北側の延長は調査区外にある。上幅0.60~1.00m、下幅0.42~0.75m、深さ約0.14mを測り、断面は逆台形状を呈する。遺構からは弥生土器、土師器(片)を出土した。

##### SD010 (Fig.2・3)

上幅1.21~3.04m、下幅0.26~2.11m、深さ0.52~0.61mを測る溝で、北から西へやや蛇行しながら延びる。埋土は概ね黒褐色粘質土で、埋土中からは弥生土器(甕)や土師器(小皿・甕)、青磁(碗)、陶器(甕)、瓦器(甕)などを出土した。

##### SD089 (Fig.2・3)

SD001に切られた溝で、上幅0.91~1.01m、下幅0.61~0.71m、深さ0.17~0.31mを測る。埋土は茶褐色土で、遺構からの出土遺物は皆無であった。

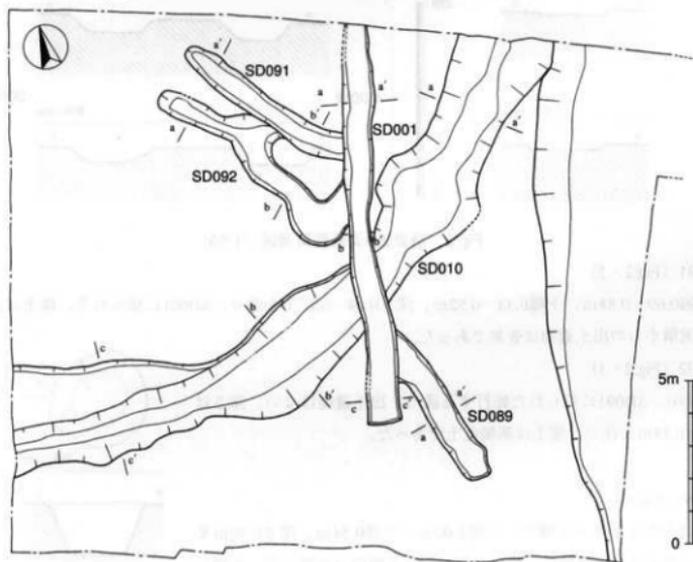


Fig.2 調査区A溝実測図 (1/150)

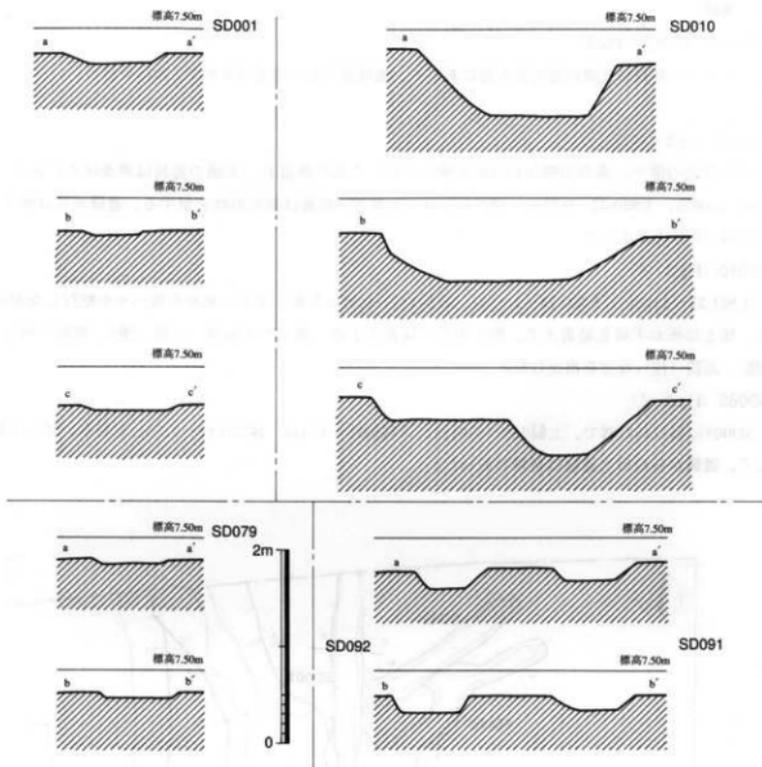


Fig.3 調査区A溝断面実測図 (1/50)

SD091 (Fig.2・3)

上幅0.69～0.88m、下幅0.38～0.52m、深さ0.09～0.17mを測り、SD001に切られる。埋土は茶褐色土で、遺構からの出土遺物は皆無であった。

SD092 (Fig.2・3)

SD001、SD091に切られた蛇行する溝で、出土遺物はない。深さは0.08～0.18mと浅く、埋土は茶褐色土であった。

土壌

SK002 (Fig.4)

ほぼ円形を呈する土壌で、上径1.00m、下径0.54m、深さ0.50mを測る。埋土は概ね黒褐色土で、遺構からは土師器（小皿・坏・土鍋）、白磁（皿）、瓦質土器（片）などを多く出土した。

ピット群 (付図②)

調査区の南端からは不整形円形を呈するピット群が検出された。出土遺物は皆無であった。

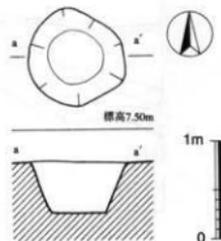


Fig.4 SK002実測図 (1/50)

調査区B (付図②・Pla.2)

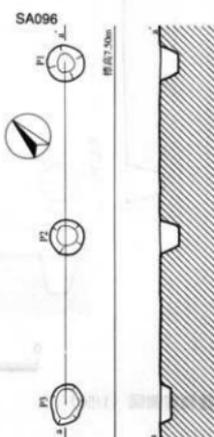
調査区Bは、当初長方形に調査区を設定していたが、SD020の溝のプラン確認のため、更に溝南東部のコーナー付近まで拡張した。拡張部の調査は、遺構を保存できることから確認調査のみに留まった。

当調査区の遺構検出面の標高は7.02～7.24mを測る。

柵列

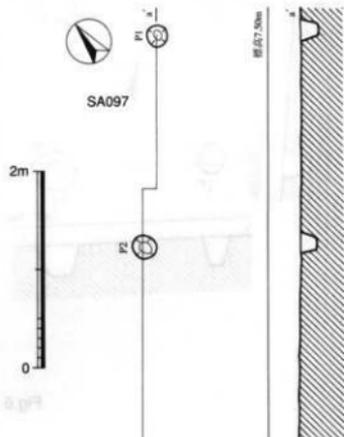
SA096 (Fig.5)

調査区の中央、東端で検出した柵列 (P1～P3) である。柱穴は不整形円形を呈し、柱間は北から1.8m、1.7mである。主軸はおよそN-43°-Eをとり、掘立柱建物になる可能性も考えられる。遺物はP3から土師器 (小皿) が出土した。



SA097 (Fig.5)

SD020西側の内縁に沿うようにほぼ円形の柵列、P1～P5を検出した。主軸はN-38°-Eをとり、埋土は黒褐色土を基調とする。P1～P3で少量の土師器 (片) が出土した。



SA098 (Fig.5・Pla.3)

SD020北側の内側で、配列状況からSK063を囲むように検出したため柵列とした。P1～P3の径が0.40～0.53m、P4の径は0.85mを測り、P4はP1～P3に比べて径が大きく、別の単独遺構になる可能性がある。遺物はP3から土師器 (片)、P4から土師器 (小皿・坏) が出土している。

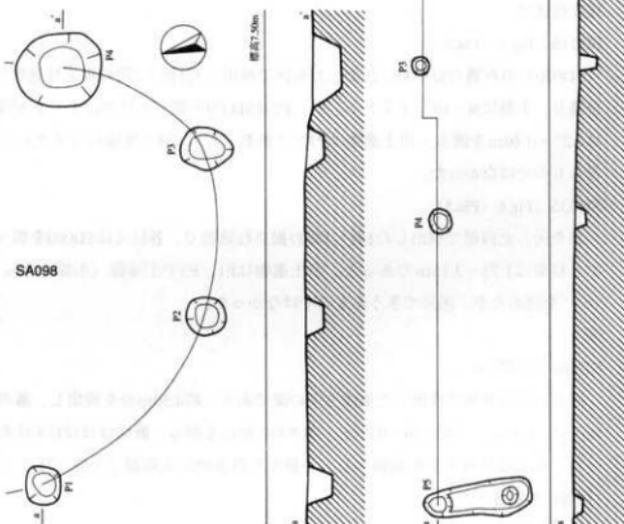
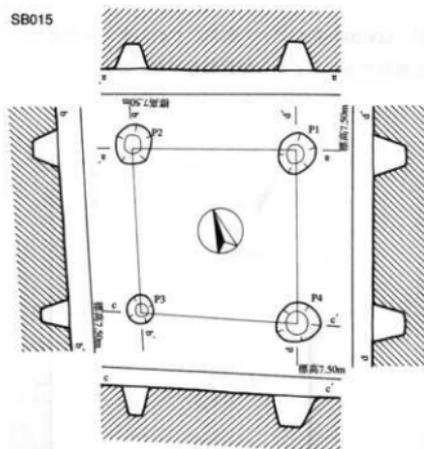


Fig.5 柵列実測図 (1/50)

SB015



SB035

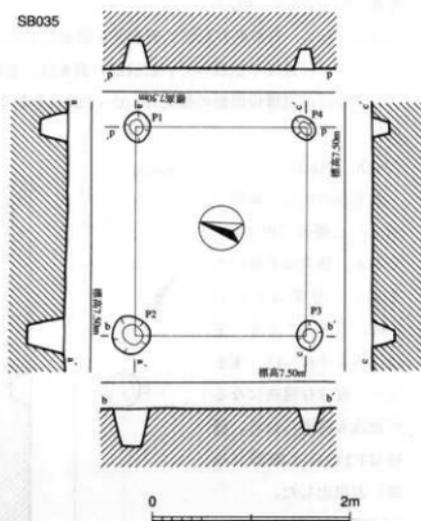


Fig.6 掘立柱建物実測図 (1/50)

## 掘立柱建物

## SB015 (Fig.6・Pla.5)

SD020の南西隅のSD100に囲まれた別区で検出した1間×1間の掘立柱建物である。柱間は1.57～1.76mを測り、主軸はN-19°-Eをとる。P1、P2はSD079を切り、柱穴はすべてがほぼ円形を呈する。柱穴の径は0.27～0.40mを測る。出土遺物はP3で土師器(片)、P4で黒曜石(スクレーパー)を認めたが、図示できるものではなかった。

## SB035 (Fig.6・Pla.5)

調査区の北西部で検出した1間×1間の掘立柱建物で、各柱穴はSD060を切っていた。主軸はN-75°-Eで、柱間は1.73～2.15mであった。出土遺物はP1、P3で土師器(小皿・片)、P2で須恵器(甕)、土師器(片)を認めたが、図示できるものではなかった。

## 溝

## SD006 (付図②)

調査区の南東隅で検出した東西方向の溝である。約4.50m分を検出し、溝の両端は調査区外に延び、上幅0.50～1.35m、下幅0.36～0.96m、深さ約0.20mを測る。断面はほぼU字状を呈し、底面はほぼ平坦であった。埋土は黒褐色土を基調とし、各層から散在的に土師器(小皿・坏・土鍋)、青磁(碗)、瓦質土器(播鉢)が出土した。

## SD017 (Fig.8)

調査区の南端で検出した東西方向の溝で、SD020を切るように7.60mを検出した。上幅0.28～0.44m、

下幅0.13～0.30m、深さ約0.12mを測り、断面はU字状を呈する。埋土は主として茶褐色土の単一土層で、区画溝と考えられる。遺物は土師器（小皿・土鍋）、青磁（碗）、瓦質土器（片）、石製品（播鉢）が出土した。

SD020 (Fig.7・付図②・Pla.2～4)

コの字状に検出した区画溝で全体の3/4程度を確認した。区画された溝の間は、短辺の心々で約25m、長辺の心々で約32m程度と推測できる。これにより、溝によって区画された土地の面積は約800m<sup>2</sup>と予測される。溝の幅は1.74～3.81m、深さは0.43～0.72mを測り、溝の断面は底面に若干の起伏が認められるが、概ねU字状を呈していた。出土遺物は各層から散在的に須恵器、土師器、陶磁器、石製品などを多量に認められた。

更に、SD020の南中央部からは、陸橋と考えられる部分を確認した。埋土は上層から黄褐色粘土→黄褐色粘土（黒色土混じり）→黒褐色粘質土で地山に至り、人為的に埋められたものと判断ができるものであった。陸橋は断面がほぼ台形状を呈していた。更に、陸橋の対面にあたるSD020の北中央部は、溝の幅が極度に狭くなっており、この位置には今一つ性格のわからないSK063・SA098が存在する。これらは一連の出入口として活用されていた可能性があるのではないかとと思われる。

ところで、SD020南西部のコーナー付近で、溝の内側を更に区画する溝（SD100）を検出した。調査では切り合い関係が認められなかったため、同一時期の溝として捉えた。しかし、本書の整理にあたり、便宜上、SD100とした。したがって、SD100から出土した遺物についてはSD020と同一の出土と捉えていたきたい。

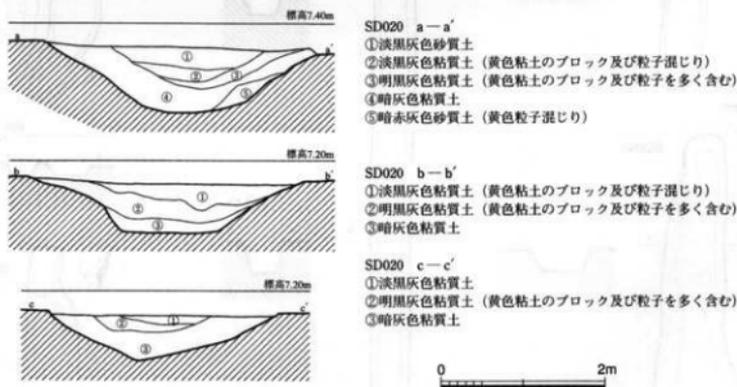


Fig.7 SD020土層断面実測図 (1/60)

SD046 (Fig.8)

全長約4.70m、幅約0.60m、深さ約0.20mを測る東西方向の溝を検出した。埋土は黒褐色土を基調とし、底面は不定形であった。出土遺物は土師器（坏・土鍋・片）、瓦器（塊）などを認めた。

SD050 (付図②)

調査区の北側で検出した東西方向の溝で、溝の北側がSD060に切られ、溝の東側は調査区Aから検出し

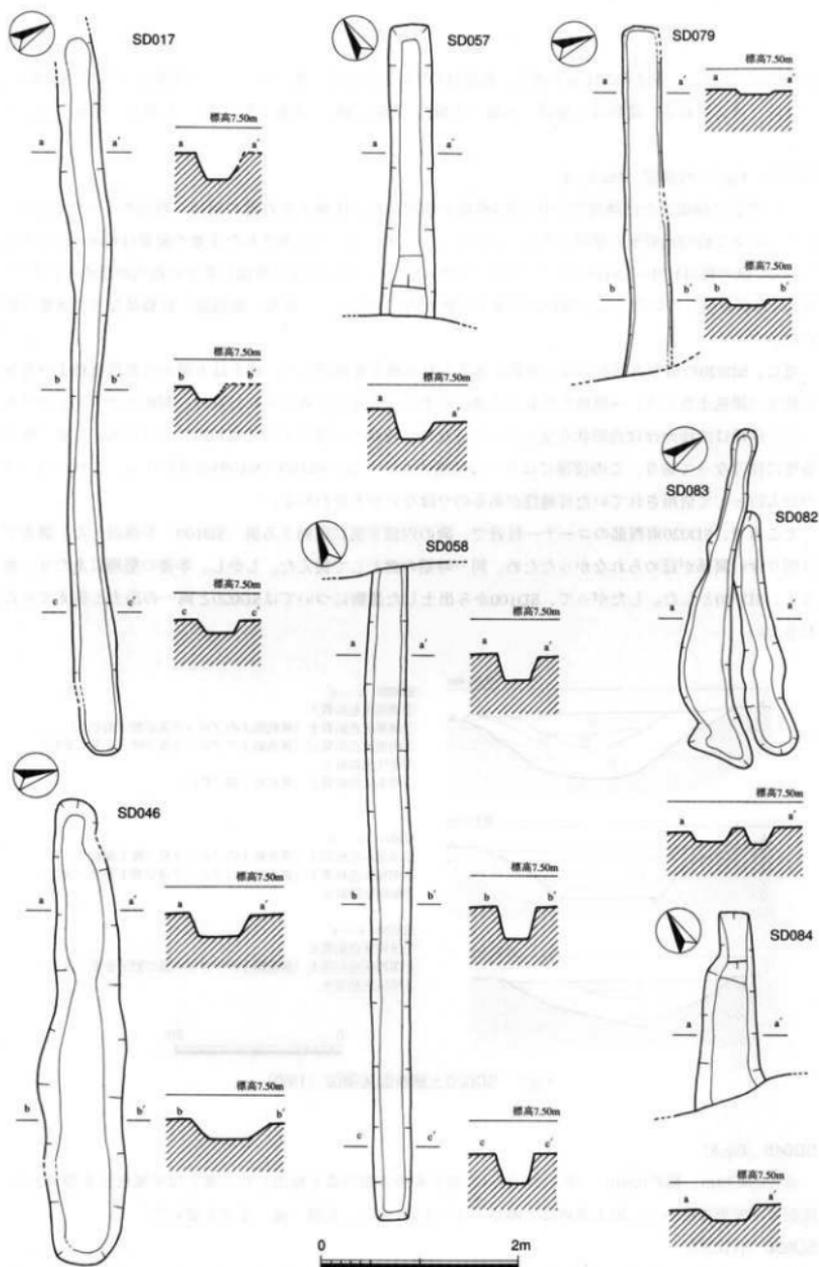


Fig.8 調査区B清実測図 (1/50)

たSD010につながる可能性がある。溝は11.39m分を確認し、上幅約2.60m、下幅1.31mを測る。溝の断面はほぼU字状を呈し、埋土は黒褐色土を基調とする。

#### SD057 (Fig.8)

SD100を切るように検出した南北方向の溝である。埋土は黒褐色土を主とし、上幅は0.42～0.54m、下幅は0.18～0.23mを測る。遺物は弥生土器(片)、須恵器(甕)、土師器(小皿・片)、青磁(片)、瓦器(塊)などを出土した。

#### SD058 (Fig.8)

南北方向の溝で、6.63m分を検出した。上幅0.42m、下幅0.26mを測り、埋土は茶褐色土であった。溝の断面は逆台形状を呈し、区画溝と考える。出土遺物は土師器(坏・片)を認めた。

#### SD060 (付図②)

SD050と同じく、調査区の北側で検出した東西方向の溝である。SD050を切るように確認し、調査区Aから検出したSD010につながる可能性がある。溝は18.26m分を確認し、上幅約2.54～3.37m、下幅1.80～2.41mを測る。溝の断面はほぼU字状を呈し、埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は埋土中から散在的に出土し、土師器(小皿・坏・甕・片)、陶器(播鉢・甕)、瓦質土器(播鉢)、瓦器(塊)、石製品(五輪塔)などを認めた。

#### SD067 (付図②)

東西方向の溝で、5.27m分を検出した。上幅0.34～0.42m、下幅0.16～0.26m、深さ0.15mを測り、埋土は茶褐色土の単一土層であった。溝の断面は逆台形状を呈し、SD058と同じく区画溝の可能性があり、出土遺物は土師器(坏・片)、青磁(片)を認めた。

#### SD079 (Fig.8)

SB015およびSD100を切るように検出した南北方向の溝である。埋土は黒褐色土を基調とし、上幅は0.38～0.46m、下幅は0.32m、深さ0.04mを測る。遺物は皆無であった。

#### SD082 (付図②)

調査区の南端で検出した東西方向の溝で、全長2.50m、幅0.28～0.43m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、土師器(片)をわずかに出土した。

#### SD083 (Fig.8)

SD082を一部切るように検出した東西方向の溝である。全長3.47m、幅0.20～0.55m、深さ0.10mを測り、埋土は黒褐色土を基調とする。出土遺物は皆無であった。

#### SD084 (Fig.8)

SD100を切るように検出した南北方向の溝である。埋土は黒褐色土を主とし、上幅は0.36～0.69m、下幅は0.20～0.46m、深さ0.10mを測る。出土遺物は皆無であった。

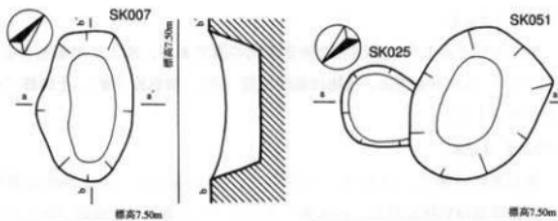
#### SD100 (付図②)

SD020南西部のコーナー付近を更に区画するように検出した区画溝である。溝の幅は1.48～2.30mを測り、断面は底面に若干の起伏が認められるが、概ねU字状を呈していた。整理作業の便宜上SD100としたが、出土遺物はSD020と同一である。遺物は各層から散在的に須恵器、土師器、陶磁器などを多量に認めた。

土壌

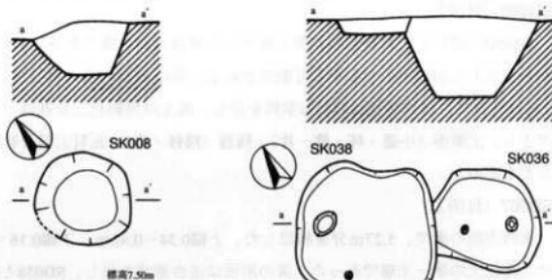
SK007 (Fig.9)

調査区の南端で検出した楕円形を呈する土壌で、主軸はN-40°-Wである。規模は長軸1.52m、短軸0.98m、深さ0.44mを測る。土壌の底面はほぼフラットで、埋土は黒褐色土を基調とする。縄文土器(片)がわずかに出土した。



SK008 (Fig.9・Pla.6)

調査区の南端で検出した円形を呈する土壌で、主軸はN-55°-Wである。上幅1.00m、下幅0.64m、深さ0.68mを測り、埋土は黒褐色土を基調とする。土師器(小皿・坏・土鍋・片)を出土遺物として認めた。



SK025 (Fig.9)

SD020・SK051を切るように検出した、深さ0.05mを測る浅い楕円形状の土壌である。埋土は茶褐色土を基調とし、出土遺物は須恵器(片)、土師器(坏、土鍋)、青磁(碗)、瓦器(碗)などを認めた。



SK036 (Fig.9)

SK038を切るように検出した楕円形の土壌で、径1.20m、深さ0.11mを測る。主軸はN-32°-W。埋土は茶褐色土の単一土層で、出土遺物は須恵器(片)、土師器(小皿・片)を認めた。更に、土壌の底面からは小ビットを確認し、土師器(碗)、青磁(片)の遺物を出土した。

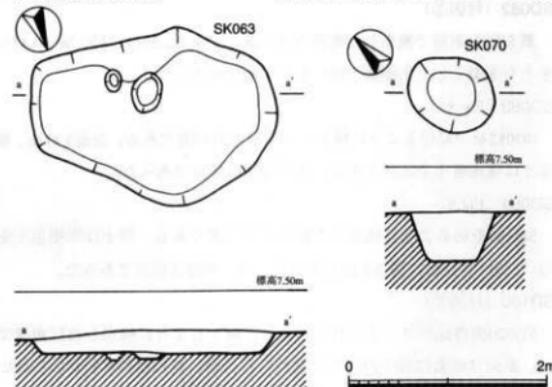


Fig.9 調査区B土壌実測図 (1/50)

#### SK038 (Fig.9)

径1.45~1.58m、深さ0.09mを測る不定形な土壌である。底面からは小ピットを認め、埋土は黒褐色土の単一土層であった。主軸はN-32°-Wをとり、土師器(小皿・土鍋・片)、陶磁器(碗)の遺物を出土した。

#### SK051 (Fig.9・Pla.6)

SK025の下端から検出したほぼ円形状を呈し、上幅0.76~0.96m、下幅0.35~0.58m、深さ0.78mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、各層から散在的に須恵器(甕)、土師器(土鍋・片)、青磁(碗)、瓦質土器(破片)などの出土遺物を認めた。井戸になる可能性がある。

#### SK063 (Fig.9・Pla.3)

SD020を切るように検出し、底面には2つのピットを有する。主軸はN-32°-Wをとり、長軸は2.51m、短軸は1.81mを測る。茶褐色土を基調とした埋土で、土壌の南側はSA098の構列が廻ることやSD020に隣接していることから、SD020との関連性が強い遺構と考える。須恵器(坏・甕)、土師器(小皿・土鍋・片)、青磁(片)、瓦器(甗)が出土した。

#### SK070 (Fig.9・Pla.6)

調査区の南端で検出した円形状の土壌である。径0.90m、深さ0.49mを測り、黒褐色土の埋土であった。出土遺物は皆無である。

#### SK080 (付図②)

調査区東側で検出した円形状の土壌で、径は2.07mを測る。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、土壌の底面はほぼフラットである。遺構の大半はSD020にカットされていたためか、出土遺物は皆無であった。

#### SK085 (付図②)

SD060に隣接した楕円形状の土壌である。長軸2.91m、短軸1.00m、深さ0.10mを測り、土師器(片)などを認めた。埋土は茶褐色土であった。

#### SK086 (付図②)

SD050に切られるように検出した半円形状を呈する土壌である。検出幅は1.47m、深さは0.05mと浅く、出土遺物は皆無であった。

#### SK090 (付図②)

SD020南西隅の溝底から検出した円形状の土壌である。径は約2.50mを測り、遺構の大半はSD020にカットされていたためか、出土遺物は皆無であった。埋土は主として黒色粘質土であった。

#### 不明遺構およびその他の遺構

#### SX040 (付図②)

調査区の南西隅で検出し、深さは0.21mを測る。SD100と関連する溝の可能性はあるが、調査では断定できなかった。埋土は主に黒茶色土で、遺物は土師器(土鍋)、青磁(碗)、白磁(皿)などが出土した。

(3) 出土遺物

調査区A

溝

SD003 (Fig.10)

土師器

坏 (4) 口径11.8cmを復元し、口縁部はやや外反する。口縁部及び内面はヨコナデで底部内面に刷毛目調整が一部認められる。外面はヘラ削り調整で、胎土は細砂粒を少し含む。須恵器坏の模倣品か。

SD010 (Fig.10・Pla.5)

陶器

常滑焼

甕 (5) 口径22.6cmを復元する。口縁部は逆L字状になるタイプで、肩部外面に格子目押印文を施す。素地は黒灰色で細砂粒、金雲母、黒色粒子を多量に含む。

土壌

SK002 (Fig.10)

土師器

小皿 (1・2) 共に糸切りで、表面磨耗のため調整不明。1は口径7.00cm、底径5.00cm、器高1.65cmを復元する。

白磁

皿 (3) 底径5.7cmを復元する。青みがかった乳白色の透明釉を全面に施し、貫入が入る。素地は灰白色で細砂粒、黒色粒子を多く含む。

調査区B

溝

SD006 (Fig.11・Pla.7)

土師器

小皿 (1~3) 1~3はすべて糸切りで、口径は6.60~8.40cm、底径は4.40~6.50cm、器高は1.35~2.00cmを測る。2は口縁部付近に煤が付着している。

坏 (4・5) 4は口径10.20cm、底径6.80cm、器高2.10~2.40cmを測り、5は口径12.20cm、底径8.00cm、器高2.95cmを測る。共に底部は糸切りである。

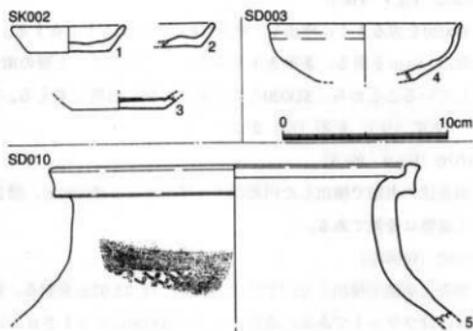


Fig.10 調査区A出土遺物実測図 (1/3)

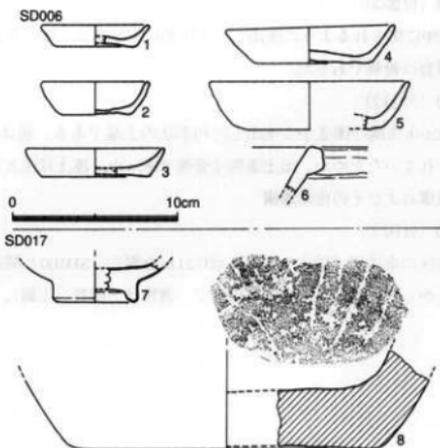


Fig.11 SD006・017出土遺物実測図 (1/3)

土鍋 (6) 玉縁状の口縁を呈し、外面には薄く煤が付着する。表面磨耗のため調整不明である。

SD017 (Fig.11)

青磁

碗 (7) 高台径5.2cmを復原する。濃緑色の釉を厚く施し、高台内は露胎である。素地は淡赤褐色で黒色粒子を少し含む。

石製品

播鉢 (8) 安山岩を石材とし、内面に幅2mm程度の溝目を施す。

SD020 (Fig.12~24・Pla.7~18)

土師器

小皿 (1~19・22・24) ほとんどが糸切りで、口径6.40~10.40cm、底径4.30~9.40cm、器高1.05~2.15cmを測る。8、12は口縁部付近に灰色から黒色の炭化物が付着し、灯明皿として使用された可能性がある。

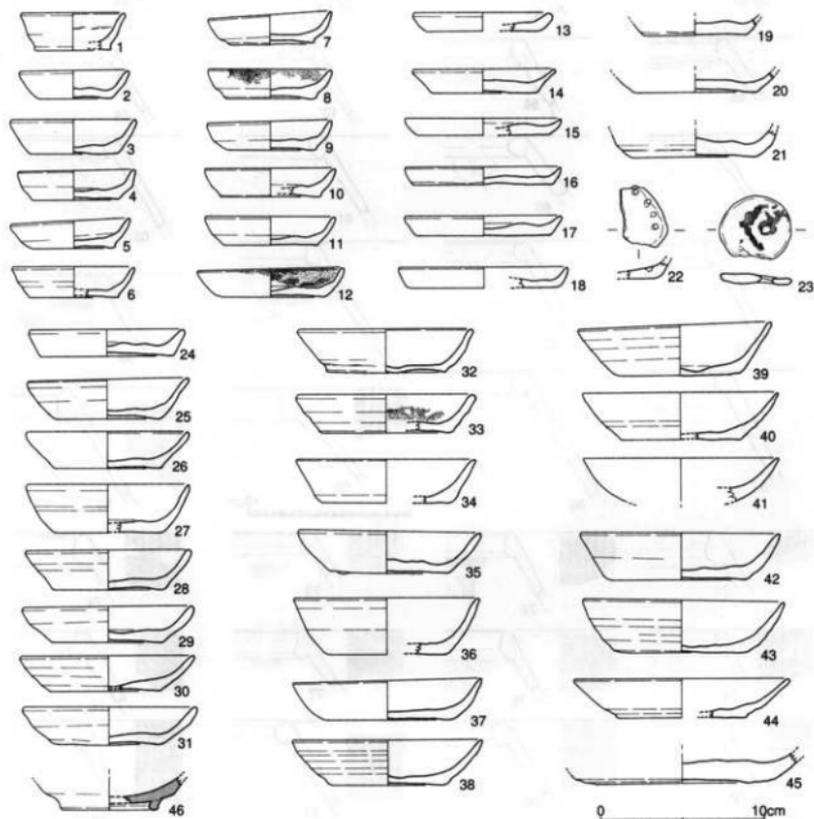


Fig.12 SD020出土遺物実測図① (1/3)

また、15の内底部に黒色の炭化物が厚く付着しており、22は内底部に4穴の穿孔が認められる。  
 坏 (20・21・25~44) ほとんどが糸切りで、口径9.60~13.20cm、底径6.30~8.30cm、器高1.65~3.50cmを測る。33、35、39、42、43は炭化物が付着している。  
 大皿 (45) 底部糸切りで、底径9.50cmを測る。内外面に茶色及び黒色の炭化物が付着している。  
 不明土製品 (23) 内底部に黒色の炭化物が厚く付着しており、中央部に6mm程度の穿孔が認められる。孔は焼成前に穿たれたと考えられる。

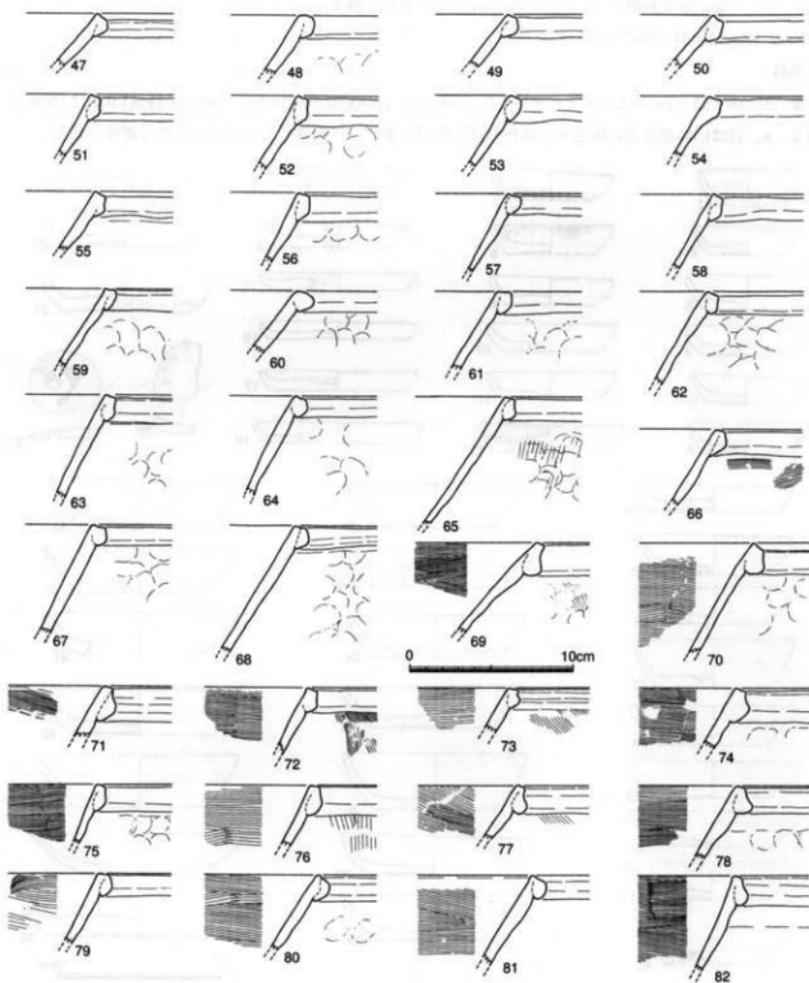


Fig.13 SD020出土遺物実測図② (1/3)

土鍋 (47~95) 47~92の口縁部は、玉縁状に施されている。すべて底部が欠損しており、調整は、内面がナデ及び刷毛目、外面が刷毛目及び指押さえて施されている。口径は32.7~44.6cmを測り、47、48、50~53、58~69、72、75、78、80~89は外面に煤が付着している。93は口径31.2cmを復原し、口縁部は素

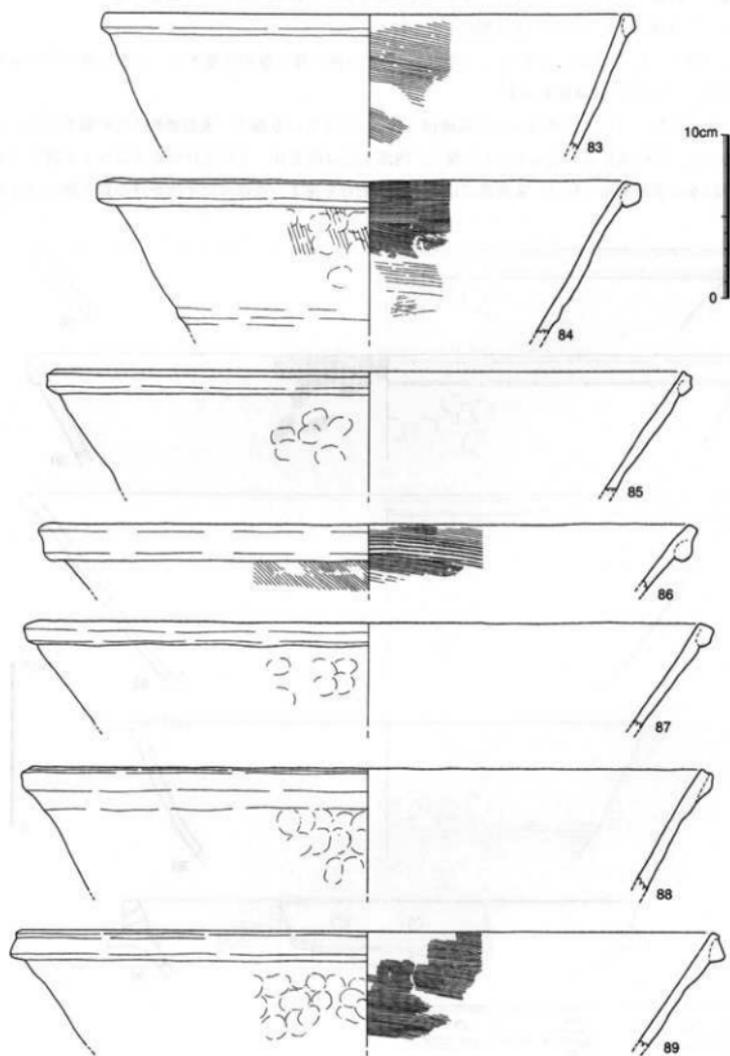


Fig.14 SD020出土遺物実測図③ (1/3)

口縁である。体部中に台形状の貼り付け突帯が施される。内面はナデ調整、外面には指頭圧痕が残り、  
 煤が厚く付着している。94、95は体部に5~8mm程度の穿孔を直接施し、台形状のツバが付く。内面は刷  
 毛目、口縁端部はヨコナデ、外面はナデ調整で外面は煤が付着する。94は口径31.2cmを復原する。

甕 (110) 口縁部は外反し、外面及び体部内面は刷毛目、口縁部内面はナデ調整を施す。

鉢 (111) 口縁部は素口縁で外面に指頭圧痕が残る。

こね鉢 (115) 口径42.4cmを復原し、内面の一部と外面に厚く煤が付着する。内面は横方向の刷毛目、  
 外面は斜め方向の刷毛目調整を施す。

火鉢 (116・123) 116は口径18.0cm、底径14.3cm、器高4.2cmを測る。表面磨耗のため調整不明。123は  
 口径32.6cm、底径28.5cm、器高8.2cmを測り、内面上位は刷毛目、下位及び外面はヨコナデ調整である。  
 外面には2本の突帯を貼り付け、突帯間には格子状の刻目を施す。底部には半円形状の脚を貼り付ける。

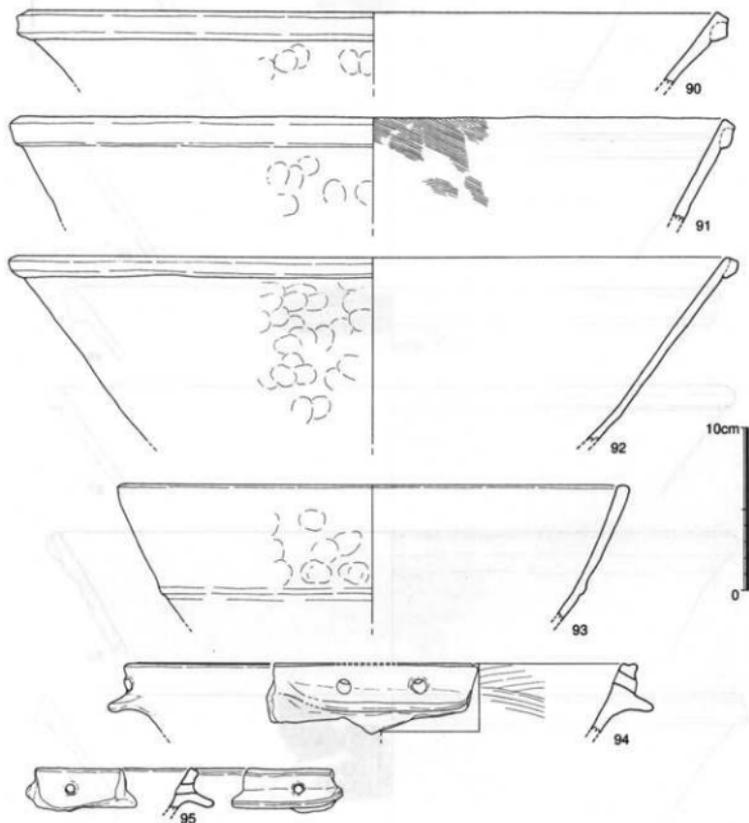


Fig.15 SD020出土遺物実測図④ (1/3)

## 瓦器

塊(46) 高台径6.0cm、現存高2.1cmを復原する。表面が磨耗しているため調整は不明である。

## 瓦質土器

擂鉢(96~100) 96は内面横方向の刷毛目調整の後、4本単位の櫛目を施し、外面には指頭圧痕が残る。口径29.4cmを復原する。

97は8本単位の櫛目を放射状に施す。外面は横方向の刷毛目調整を施し、指頭圧痕が残る。底径は16.6cmを復原する。98は体部内面に太い櫛目を放射状に施し、口径は31.2cmを復原する。99は

底部内面に不定方向の櫛目、体部内面は放射状に櫛目を施す。底径14.1cmを復原する。100は内面に8本単位の櫛目を放射状に施す。99と同一個体の可能性がある。

鉢(112~114) 112は口径23.4cmを復原する。体部の内面はナデ、外面は刷毛目、口縁部はヨコナデ調整を施す。113は口径22.0cmを復原し、口縁部はヨコナデ、体部内面は刷毛目調整を施す。外面には薄く煤が付着している。114は口径26.2cmを復原する。体部内外面とも刷毛目、体部下位はヘラで調整をしている。

火鉢(117~122・125~128) 117は底径17.6cmを復原する。内面は横方向の刷毛目、体部外面は縦方向の刷毛目で、底部外面はヨコナデ調整を施す。118は口径20.6cm、底径14.3cm、器高

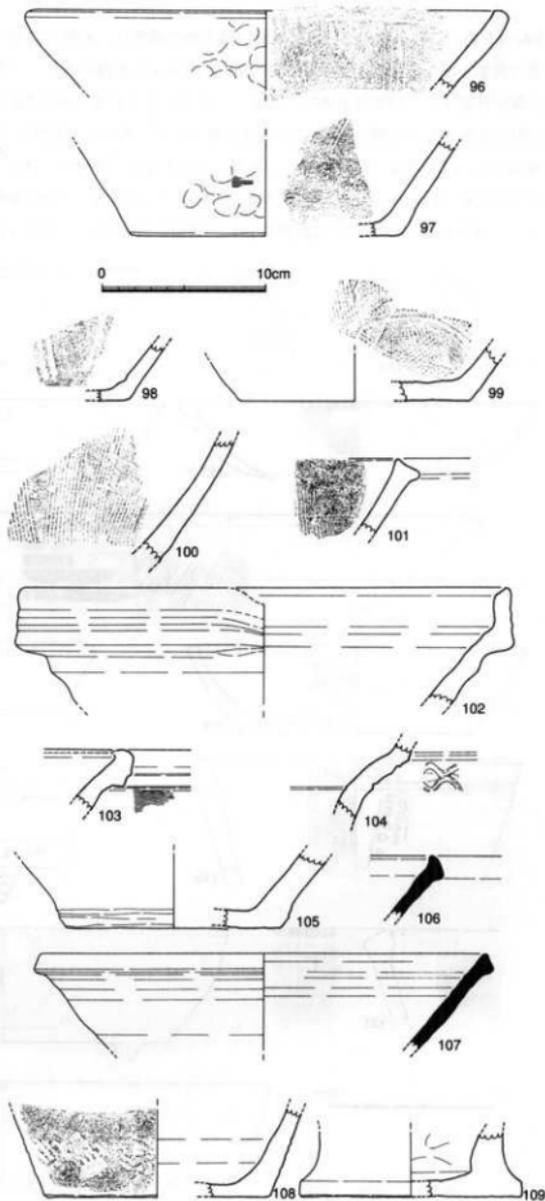


Fig.16 SD020出土遺物実測図⑤ (1/3)

5.4cmを測る。体部内面及び底部外面は横方向の刷毛目、底部内面及び口縁部はヨコナデ、体部外面は刷毛目調整を施し、指頭圧痕が残る。119は口径20.0cmを復原する。内面は刷毛目調整を施し、口縁部内面に煤が付着する。口縁部外面には爪形文の刻印の下位に横方向の2条の沈線を施し、体部外面には菱形文の刻印を挟むように縦方向の2条の沈線が施される。香炉の可能性もある。120は底径14.4cmを復原する。体部下位には菊花文の印刻を施し、脚部には爪形文を印刻する。香炉の可能性もある。121は口縁端部及び内面は横方向の刷毛目で、外面は縦方向の刷毛目を施す。122は内面が横方向の刷毛目で口縁部はヨコナデ、外面は縦方向の刷毛目調整を施し、指頭圧痕が残る。125～127は口径36.0～38.8cmを復原する。

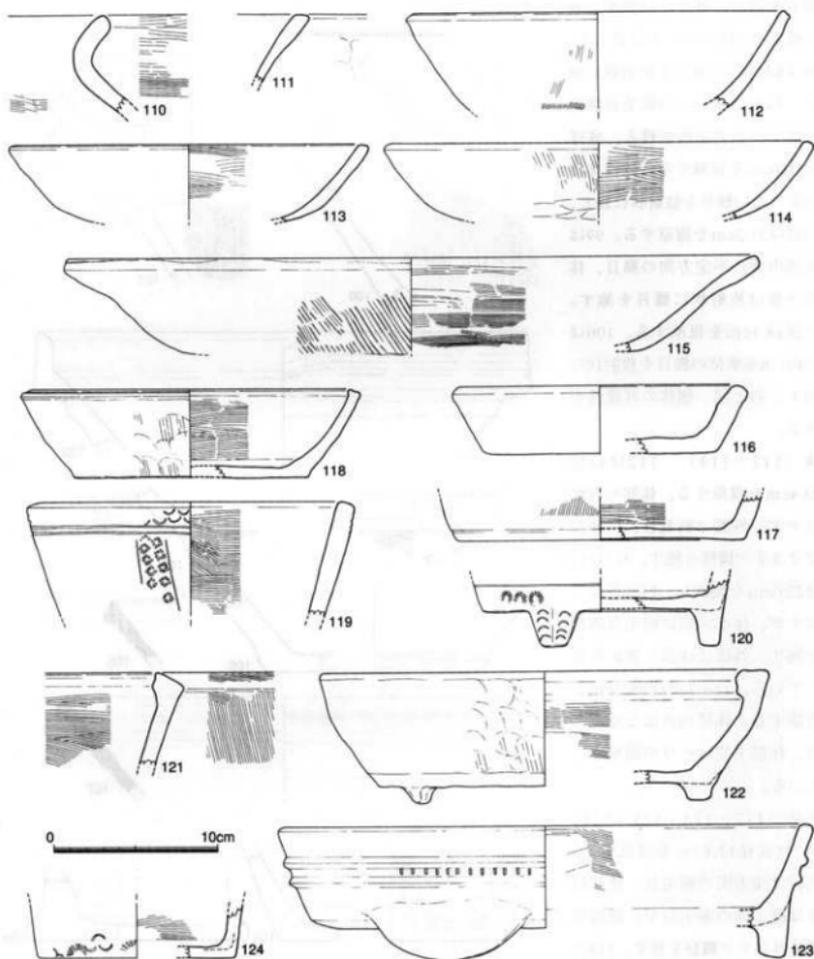


Fig.17 SD020出土遺物実測図⑥ (1/3)

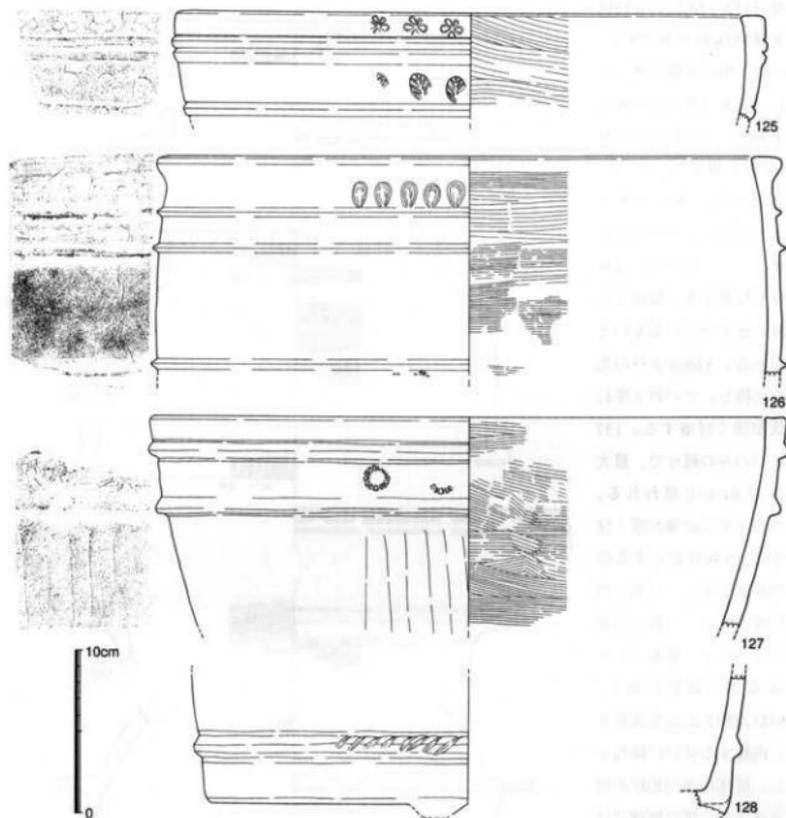


Fig.18 SD020出土遺物実測図⑦ (1/3)

口縁部から体部にかけて2~3条の貼付突帯を施し、梅花文、葉文、菊花文の印刻が施されている。128は底径31.8cmを復原し、台形状の脚が付くものと思われる。体部下位には貼付突帯を施した後、縄目状に刻目を施している。

風炉 (129~132) 129は口径15.2cmを復原し、内傾する低い口縁部を呈し、やや肩部が張る。肩部に1条の細い貼付突帯と菊花文の刻印を施し、外面及び口縁部はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目の後、指押さえを施す。130は口径16.4cmを復原し、直立する低い口縁部を呈し、やや肩部が張る。肩部に1条の細い貼付突帯と菊花文の刻印を施し、菱形文の刻印を施す。外面及び口縁部はヨコナデ、内面は磨耗が著しく、調整不明である。131は口径18.2cm、最大径25.6cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部上位は丁寧な横方向の刷毛目、下位は縦方向の刷毛目、口縁部内面は斜め方向の刷毛目、体部内面は工具によるナデ調整が施される。132は口径26.4cmを復原する。口縁部上位及び外面はヨコナデ、口縁部下位は刷毛目、肩部内面は工具によるナデ調整で、体部には3条の沈線が施される。

茶釜 (133~142) 133は最大径28.0cmを復元する。ツバの下半には煤が薄く付着し、内面は横方向の刷毛目を施す。134は最大径29.1cmを復元し、ツバの下半には煤が薄く付着する。135は最大径32.0cmを復元し、ツバの下半には煤が厚く付着する。体部下位は薄く仕上げているものと思われる。136はツバの先端を欠損し、ツバの下半には煤が厚く付着する。137はツバのみの細片で、最大径は32.8cmと思われる。ツバの下半には煤が厚く付着する。138は直立する低い口縁部を呈し、内面に指頭圧痕が残る。外面の口縁部はヨコナデ、肩部は工具によるナデ調整を施す。139は口径15.2cmを復元する。内傾する低い口縁部を呈し、肩部に半円形状の突起を有する。更に肩部には2条の低い突帯と沈線が施され、その間には菊花文の刻印がスタンプされる。また、肩部の2ヶ所に7mm程度の穿孔が施される。140はほぼ直立する低い口縁部を呈し、口径16.0cmを復元する。肩部には菊花文の印刻が施される。141は直立する低い口縁部を呈し、やや肩部が張る。

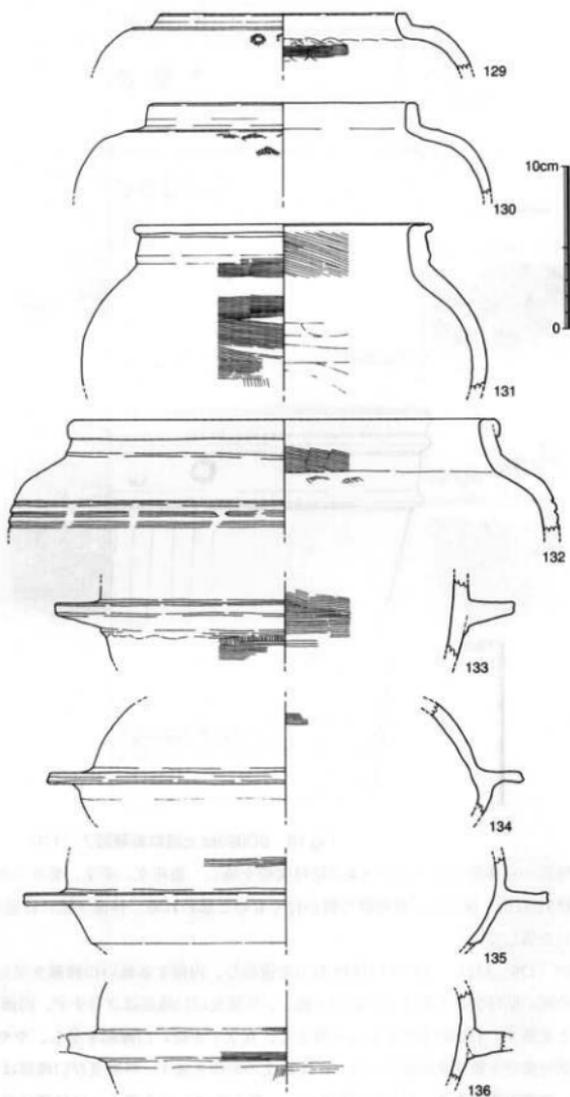


Fig.19 SD020出土遺物実測図⑧ (1/3)

口径14.8cm、最大径28.6cmを復原し、肩部に1条の沈線と梅花文の印刻を施す。内面は横方向の刷毛目、外面はヨコナデ調整を施す。142は直立する口縁部を呈し、肩部に4.5mm程度の穿孔を施す。口径17.0cm、最大径15.9cmを復原し、ツバの下半は煤が厚く付着する。内面は刷毛目及び一部工具によるナデ調整で、外面の口縁部及び体部下半は縦方向の刷毛目で他は磨耗のため調整不明である。

香炉 (124) 底径12.1cmを復原し、体部下位には爪形文、菊花文の印刻を施す。内面及び底部外面は刷毛目調整である。

#### 須恵器

鉢 (106・107) 共に東播系の鉢で、口縁部が玉縁状を呈し、内外面ともヨコナデ調整である。胎土の表面に黒斑を認める。107は口径28.0cmを復原する。

甕 (103~105) 103は口縁端部が欠損し、口縁部外面は2条の凹線が入る。体部上位には細かい波状文が施される。内面は

ナデ調整。104は外面に2条の波状文を網状に施す。内面には沈線が入る。105は底径13.3cmを測り、内面はヨコナデ、外面はヘラ削り調整である。

#### 陶器

甕 (108) 底径14.0cmを復原し、体部下位に格子目叩きを施す。内外面の調整はナデである。

#### 備前焼

擂鉢 (101・102) 101は口縁端部をやや立上げるようにナデが施される。102は口縁部をほぼ垂直に立上げ、外面は3条の凹線が入る。内面の櫛目は8本単位で、口径30.4cmを復原する。

#### 瀬戸焼

瓶子 (109) 底径13.6cmを復原する。内外面は回転ナデ調整で、底部外面は不明。外面に明灰緑色の釉がまだらにかかる。

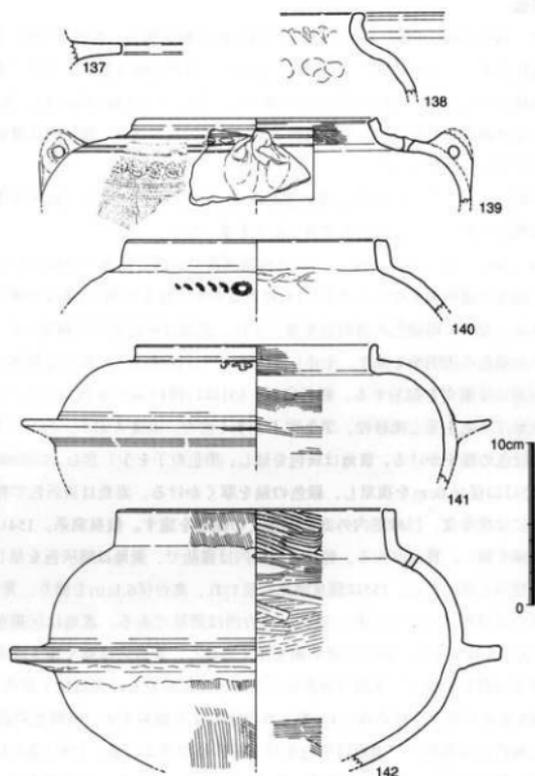


Fig.20 SD020出土遺物実測図⑨ (1/3)

## 青磁

皿 (143・144・148) 143は濁った緑灰色の釉を施し、素地は灰色で細砂粒を少し含む。144は口縁部に輪花であしらい、化粧の上から青色がかった緑色の釉を施す。全体に貫入が入り、素地は灰褐色を呈し細砂粒を少し含む。148は底部のみの細片で、見込みは沈線がみられ、高台内には墨書で文字が描かれるが、文字は読みとれない。内面に黄色がかった透明釉を施し、高台内は露胎である。素地は淡灰褐色で細砂粒と黒色粒子を多く含む。

小碗 (145) 口径7.9cm、高台径4.4cm、器高3.6cmを測る。緑色の透明釉を厚くかけ、高台内面の一部は露胎である。素地は灰色で黒色粒子を多く含む。

碗 (146・147・150～159) 146は龍泉窯系で外面に鎊連弁が施される。全体に貫入が入り、黄色がかった緑色の透明釉を厚くかける。147は同安窯系で体部内面に1条の沈線が入り、細かい櫛目が内外面に施される。全体に暗緑色の透明釉を薄くかけ、素地は灰色を呈し精選されている。150は化粧の上に青みがかった緑色の透明釉を施す。全体に貫入が入り、素地は淡灰褐色で精選され、黒色粒子を多く含む。口縁部外面には雷文を線刻する。龍泉窯系。151は口径12.4cmを復原する。青みがかった緑色の釉を薄くかけ、素地は灰色を呈し細砂粒、黒色粒子を多く含む。高麗青磁か。152は口径14.6cmを復原し、化粧掛けの上に緑色の釉をかける。素地は灰色を呈し、黒色粒子を少し含む。口縁部外面に雷文を線刻する。龍泉窯系。153は口径16.0cmを復原し、緑色の釉を厚くかける。素地は淡灰色で精選され、黒色粒子を多く含む。内面には唐草文、口縁部内外面には雷文の線刻を施す。龍泉窯系。154は高台径5.1cmを測る。濃緑色の透明釉を施し、貫入が入る。壺付と高台内は露胎で、素地は暗灰色を呈し細砂粒、黒色粒子を多く含む。龍泉窯系と思われる。155は龍泉窯系と思われる、高台径6.1cmを測り、黄色がかった暗緑色の釉を薄く施す。高台には釉ダレがみられ、壺付と高台内は露胎である。素地は灰褐色で精選されている。156は高台径6.0cmを復原する。緑色の透明釉を厚く施軸し、高台内は釉を掻き取る。全体に貫入が入り、外面には唐草文の線刻を施す。素地は灰色から淡赤色で細砂粒及び黒色粒子が多く含まれる。龍泉窯系。157は高台径5.9cmを測り、見込みに4分割された唐草文を線刻する。暗緑色の透明釉を施軸し、貫入が入る。壺付と高台内は露胎で、素地は灰色を呈し細砂粒が含まれる。158は高台径5.4cmを測り、緑色の透明釉を施軸し貫入が入る。壺付と高台内は釉を掻き取り、体部外面には縦方向の線刻、見込みに「卍」と花文を線刻する。素地は灰色で細砂粒を多く含む。龍泉窯系。159は高麗青磁と思われる。化粧掛けの上に黄色がかった緑色の釉を全面施軸し、素地は淡褐色で細砂粒を少し含む。見込みに現存で4つの目跡があり、6ヶ所あったとされる。また、割れ口の1辺が極度に磨耗しており、砥石として再利用されていた可能性が考えられる。

小壺 (149) 外面に淡い青色の透明釉を薄くかけ、内面は露胎で一部釉ダレを認める。外面には花文が施される。

## 白磁

皿 (160～162) 160は底径6.6cmを復原し、青みがかった透明釉を全面に薄く施軸する。素地は淡灰色で黒色粒子を少し含む。161は口径11.0cm、高台径5.8cm、器高3.05cmを測る。灰色を帯びた白色の釉をかけ、壺付は釉を掻き取る。素地は淡褐色で細砂粒を少し含み、焼成は不良である。162は口径12.8cm、高台径5.7cm、器高3.2cmを測る。口縁部外面と内面に淡い青色の透明釉を施し、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。素地は灰色で精選され、黒色粒子を多く含む。

碗 (163～168) 163～165は玉縁口縁で、いずれも口縁部に釉ダレがみられる。166は高台径6.9cmを測

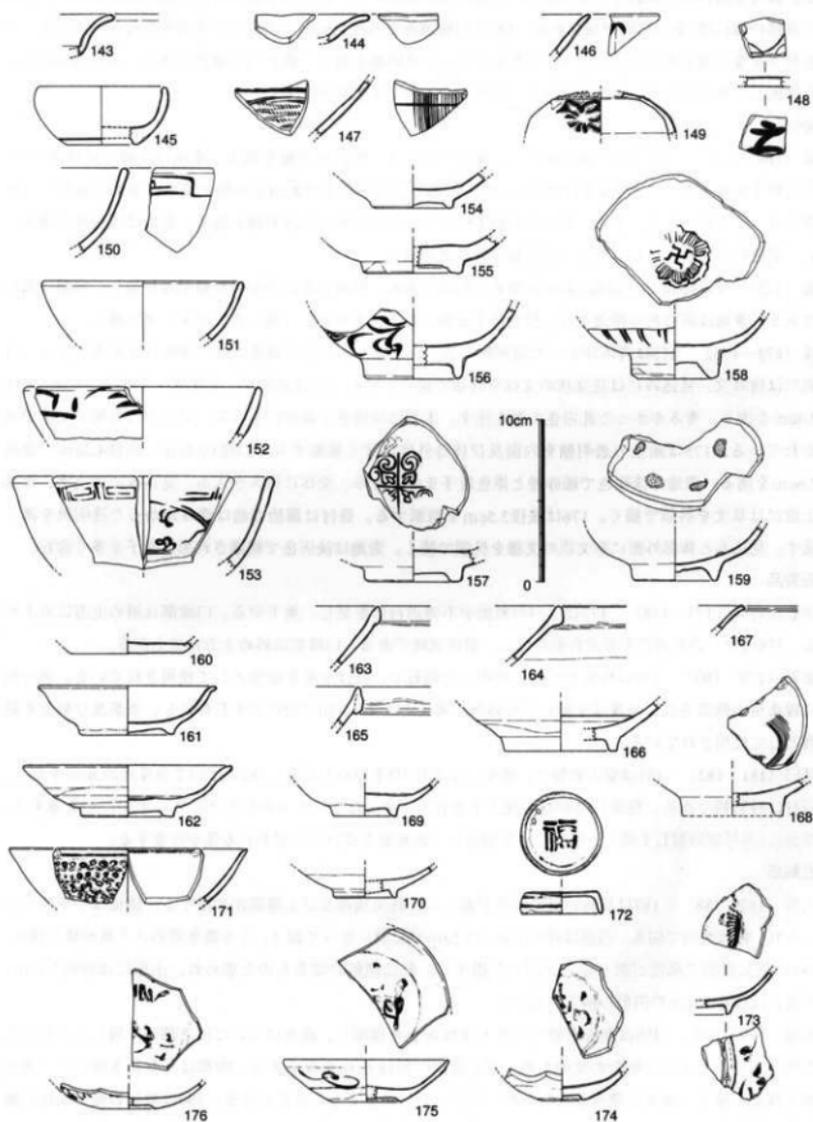


Fig.21 SD020出土遺物実測図⑩ (1/3)

る。壘付と高台内は露胎で、青みがかった透明釉が施される。見込みは蛇の目状に釉が掻き取られ、体部と底部の境には1条の沈線が施される。167は口縁端部を外反させる。淡緑色の透明釉を施し、淡灰色で黒色粒子を多く含む素地である。168は青みがかった透明釉を施し、高台内は露胎である。高台径は6.2cmを復元し、見込みに細かい櫛目を施す。素地は淡灰色で黒色粒子を多く含む。

#### 染付

碗 (169~171) 169は高台径3.9cmで、体部内外面まで乳白色の釉を施す。素地は淡褐色で精選され、黒色粒子を多く含む。170は高台径3.9cmで、内面と体部下位まで乳白色の釉を施す。素地は淡褐色で精選され、黒色粒子を多く含む。171は口径14.5cmで、青みがかった透明釉を施す。素地は灰白色で精選され、黒色粒子を多く含む。外面には呉須で唐草文を描く。

蓋 (172) 口径5.0cm、器高1.4cmを測る完形品である。外面に青みがかった透明釉を施し、内面は露胎である。素地は灰白色で精選され、黒色粒子を多く含む、天井部に「福」の文字を呉須で描く。

皿 (173~176) 173は青みがかった透明釉を施し、素地は灰白色で精選され、黒色粒子を多く含む。外面には唐草文、見込みに花文状の文様を呉須で描く。174~176は底部が「菴首底」である。174は底径2.4cmを測り、青みがかった乳白色の釉を施す。素地は淡褐色で細砂粒を含み、見込みに呉須で文字が描かれている。175は胎色の透明釉を内面及び体部外面に薄く施す。口径10.2cm、底径4.2cm、器高2.6cmを測る。素地は淡褐色で細砂粒と黒色粒子を多く含む、全体に貫入が入る。見込みに文字、体部上位には草文を呉須で描く。176は底径3.5cmを復元する。壘付は露胎で他は青みがかった透明釉を薄く施す。見込みと体部外面に草文状の文様を呉須で描く。素地は淡灰色で精選され黒色粒子を多く含む。

#### 石製品

滑石製石鍋 (177・178) 177はツバの断面が不等辺台形を呈し、垂下がる。口縁部は斜め上方に立上がる。178はツバの断面が不等辺台形を呈し、退化気味である。口縁部は斜め上方に立上がる。

砥石 (179・180) 179は砂岩を石材に利用した砥石で、ほぼ全面を砥面として使用されている。部分的に線条痕が観察され、金属品を砥いだ可能性が考えられる。180は硬砂岩を石材にし、表裏及び側面を砥面として使用されている。

挽臼 (181・182) 181は安山岩製で、播面には播目が3本認められる。182は上臼で復原径29.8cmを測り、石材は砂岩製である。側面に方形の挽き手を有し、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。播面に6本単位の播目を施し、側面には破損後に二次焼成を受けたと思われる煤が付着する。

#### 五輪塔

火輪 (187・188) 187は凝灰岩製で風化が激しく、軒先端部及び上端部が欠損する。降棟はやや反りがみられ、軒は傾斜で切る。内部は径9.1cm~18.5cmで空洞になっており、くり貫き時のノミ痕が粗く残る。188は凝灰岩製で風化が激しく、上部が欠損する。軒は傾斜で切るものと思われ、上面には径約7.4cm、下面には径約4.5cmの円形の柄穴を設ける。

水輪 (189・190) 189は凝灰岩製で、最大径28.0cmを復元し、高さについては下部が欠損しているため不明である。上部では組合わせのための柄を設け、径18.6cmを復元する。内部はくり貫き時のノミ痕が粗く残る。種子は確実に読みとれないが、「𪛗」(ハ)になるものと思われる。190は凝灰岩製で風化が激しく、最大径26.7cmで、高さについては上端部、下端部が欠損しているため不明である。内部は13.4cm~15.5cmで空洞になっており、くり貫き時のノミ痕が粗く残る。四方に表された種子は、「𪛗」(ハ)・「𪛗」(ハ)・「𪛗」(ハ)・「𪛗」(ハ)と展開する。

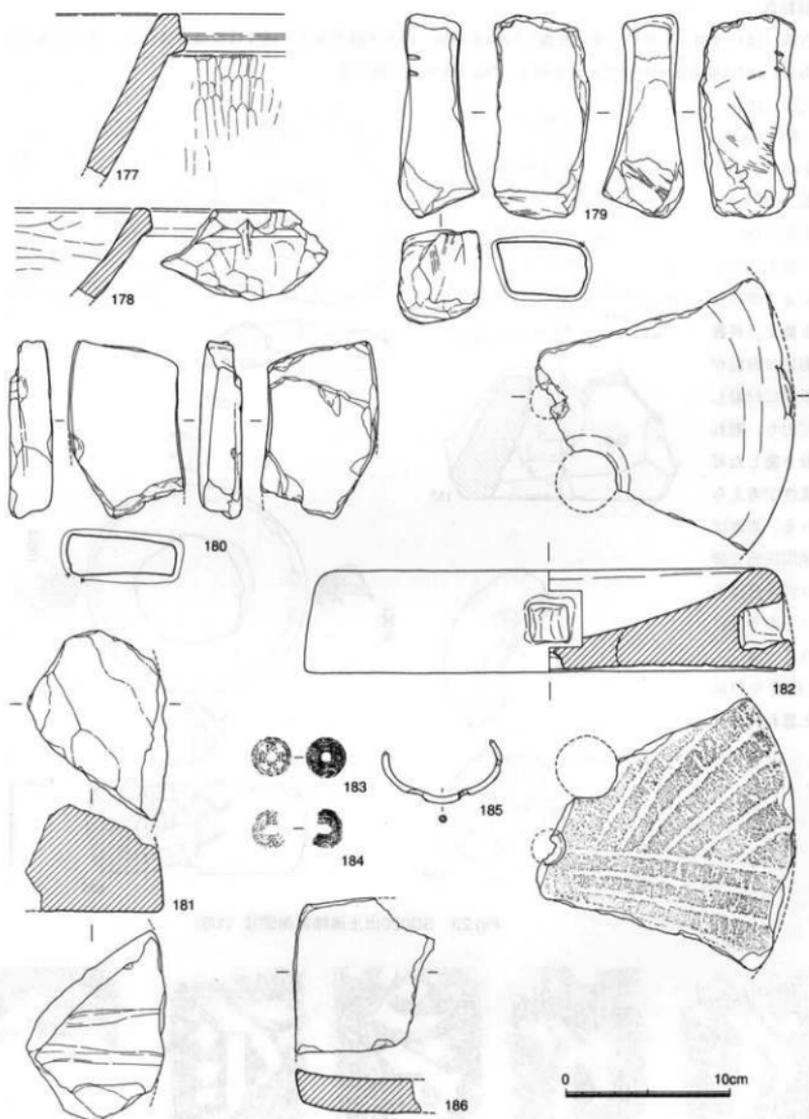


Fig.22 SD020出土遺物実測図① (1/3)

銅製品

古銭 (183・184) 共に「淳化元寶」(990年初鑄)の北宋銭である。銭文は真書の書体で、背面は無文である。183は完形品で直径2.4cmを測り、184は側部を欠損する。

把手 (185)

肉厚は4mmを測る。

瓦

平瓦 (186)

側面は削りによる面取りを施す。表裏面には砂粒が多量に付着しており、離れ砂を施した可能性が考えられる。素地は淡黒灰色で細砂粒及び黒色粒子を多量に含んでいる。1枚造りの瓦と思われる。

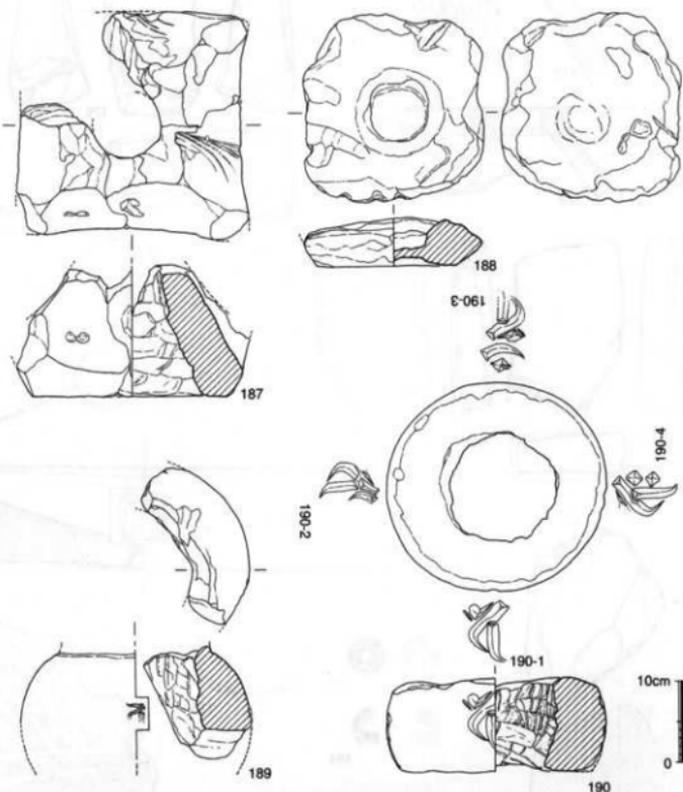


Fig.23 SD020出土遺物実測図⑫ (1/6)



Fig.24 SD020出土の五輪塔種子拓影 (1/3)

SD030 (Fig.25・Pla.19)

須恵器

鉢 (1) 東播系の鉢で口縁部が玉縁状を呈し、内外面ともヨコナデ調整である。素地は細砂粒及び黒色粒子を多く含み、表面に黒斑を認める。

青磁

皿 (5) 同安窯系で見込みに細かい櫛目を施す。内面及び体部外面まで青みがかった透明釉を施す。素地は灰褐色を呈し細砂粒を少し含む。

碗 (2) 龍泉窯系で外面に鎗連弁が施される。全体に貫入が入り、黄色がかった緑色の透明釉を厚くかける。素地は灰色で黒色粒子を少量含む。

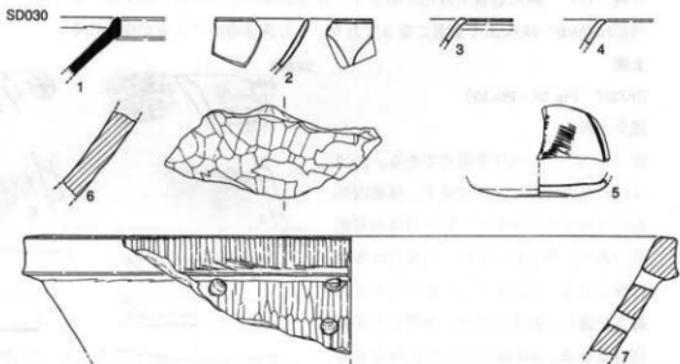
白磁

碗 (3・4) 共に口縁端部の断面が三角形状を呈する。3は青みがかった透明釉を施し、素地は灰色で黒色粒子を少量含む。4は鉛色の透明釉を薄く施し、素地は灰色で黒色粒子を少量含む。

石製品

滑石製石鍋 (6・7)

6・7は同一個体と考えられ、外面には薄く煤が付着する。7は口径39.8cmを復原する。ツバの断面が三角形を呈し、端部に僅かながら面が残る。口縁部は斜め上方に立上がり、体部に1.0cm程度の把手穴を3つ施す。



SD046 (Fig.25)

土師器

香炉 (8) 口径は10.4cmを復原し、口縁部に菊花文の印刻を施している。内面は刷毛目、口縁部はヨコナデ調整で、体部外面は表面が磨耗のため調整不明である。

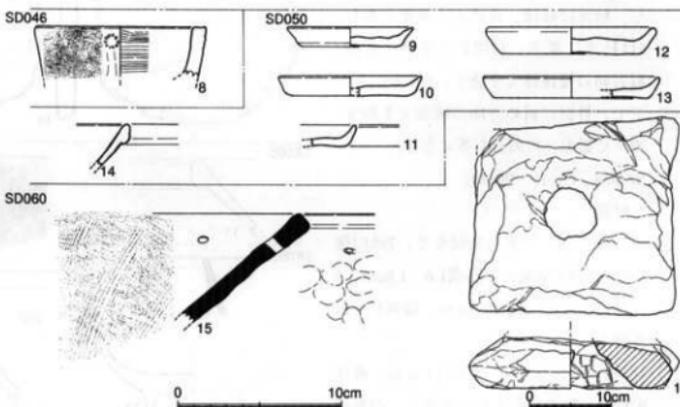


Fig.25 SD030・046・050・060出土遺物実測図 (1/3)(1/6)

SD050 (Fig.25)

土師器

小皿 (9~13) 口径7.8~10.8cm、底径5.8~9.5cm、器高1.3~1.7cmを測る。すべて糸切りである。

白磁

碗 (14) 口縁は玉縁状を呈し、青みがかった透明釉を施する。素地は白灰色で黒色粒子を多く含む。

SD060 (Fig.25・Pla.18, 19)

須恵器

播鉢 (15) 内面はヨコナデ調整の後、8本単位の櫛目が斜め方向に施される。外面は上位がヨコナデで、下位には指頭圧痕が残る。体部上位に5mm程度の穿孔を認め、素地は淡灰色で細砂粒及び黒色粒子を多く含む。

石製品

五輪塔

火輪 (16) 凝灰岩製で風化が激しく、軒先端部及び上部が欠損する。軒は傾斜で切るものと思われる。内部は径6.0~14.0cmで空洞になっており、くり貫き時のノミ痕が粗く残る。

土壇

SK007 (Fig.26・Pla.19)

縄文土器

鉢 (1~6) 1~4は曾畑式である。1・2は口唇部内外面に連続刺突文、体部内外面には短沈線文を施す。同一個体の可能性があり、胎土には雲母、角閃石が多量に含まれる。3は横方向と縦方向の短沈線文を施し、胎土に雲母、角閃石が多量に含まれる。4は縦方向の短沈線文を施し、胎土に雲母、角閃石を微量に含む。5は胎土に雲母、角閃石を多量に含む、縦方向の短沈線文を施す。6は野口タイプで、外面に斜め方向の線刻文を施す。胎土に雲母、角閃石を多く含む。

SK008 (Fig.26・Pla.20)

土師器

小皿 (7・8) 共に糸切りで、7は口径8.9cm、底径6.8cm、器高1.6~1.8cm、8は口径8.7cm、底径6.6cm、器高1.7cmを測る。

坏 (9) 糸切りで、口径14.2cm、底径9.5cm、器高2.9~3.3cmを測る。内外面に煤が薄く付着する。

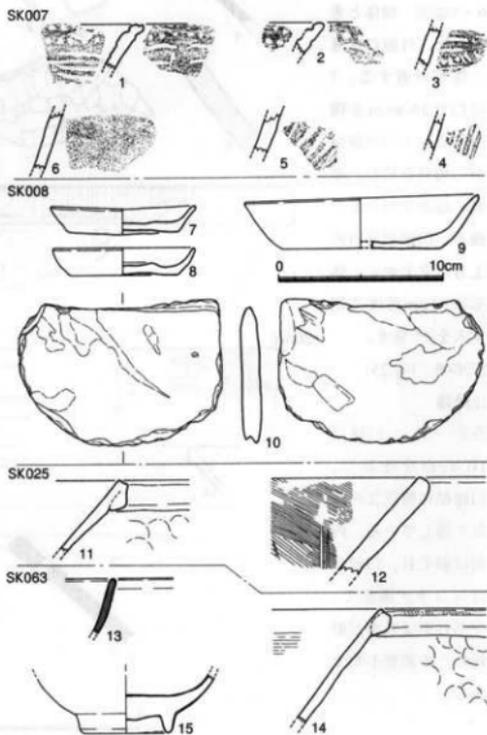


Fig.26 SK007・008・025・063出土遺物実測図 (1/3)

## 石製品

砥石 (10) 片岩を石材に利用した砥石で、ほぼ全面を砥面として使用されている。

SK025 (Fig.26)

## 土師器

土鍋 (11) 玉縁状の口縁を呈し、内面刷毛目、外面はヨコナデ調整で指頭圧痕が残る。

## 瓦質土器

播鉢 (12) 内面は斜め方向の刷毛目、外面は表面磨耗のため調整不明。内面に縦方向の櫛目を施す。

SK063 (Fig.26)

## 瓦器

甕 (13) 素地は灰色で精選され、表面磨耗のため調整不明。微かに内面に横方向のミガキを認める。

## 土師器

土鍋 (14) 玉縁状の口縁を呈し内面は刷毛目調整で外面には指頭圧痕が残る。外面には煤が付着する。

## 青磁

碗 (15) 高台径5.7cmを復原する。青みがかった緑釉を全面に施釉し、高台内を蛇の目状に掻取る。全体に貫入がみられ、見込みは草文の線刻が施される。素地は灰色から赤褐色で精選されている。

## ビット群

SP014 (Fig.27)

## 土師器

土鍋 (1) 玉縁状の口縁を呈し、内外面は横方向の刷毛目調整である。

SP024 (Fig.27)

## 須恵器

鉢 (2) 東播系の鉢で口縁端部は内弯し、内外面はヨコナデ調整である。素地は細砂粒及び黒色粒子を多く含み、表面に黒斑を認める。

SP029 (Fig.27・Pla.20)

## 土師器

土鍋 (3) 口縁部の断面が台形状を呈し、上端面に押圧縄文を施す。調整は内外面ともやや目の粗い刷毛目である。

SP081 (Fig.27)

## 瓦質土器

火鉢 (4) 口径17.2cmを復原し、口縁部外面に爪形文と2条の沈線を施す。調整は内面が斜め方向の刷毛目、外面はナデである。口縁部の端部及び内面に薄く煤が付着する。

## 不明遺構

SX040 (Fig.27・Pla.20)

## 土師器

土鍋 (5・6) 共に玉縁状の口縁を呈し、外面に薄く煤が付着する。5は内面ナデ調整で外面に指頭圧痕が残る。6は内面は磨耗のため調整不明で、外面には目の粗い縦方向の刷毛目を施す。

### 青磁

碗 (7) 口縁部細片で、濃緑色の釉を施す。全体に貫入が入り、素地は乳白色で細砂粒少し含む。

### 白磁

碗 (8) 口縁部はやや外反し、体部内面に沈線を施す。白色の透明釉を施し、素地は乳白色で黒色粒子を多く含む。

### 表土採集 (Fig.27・Pla.20)

### 須恵器

坏 (16) 立上がりは内側斜め方向へ立ち上がる。底部外面はヘラケズリで他はヨコナデ調整である。素地は淡灰色で細砂粒を多く含む。

甕 (17) 底径14.8cmを復元し、口縁部を大きく外反させる。口縁部はヨコナデで、内面は横方向の細かい刷毛目である。外面には叩きを施す。

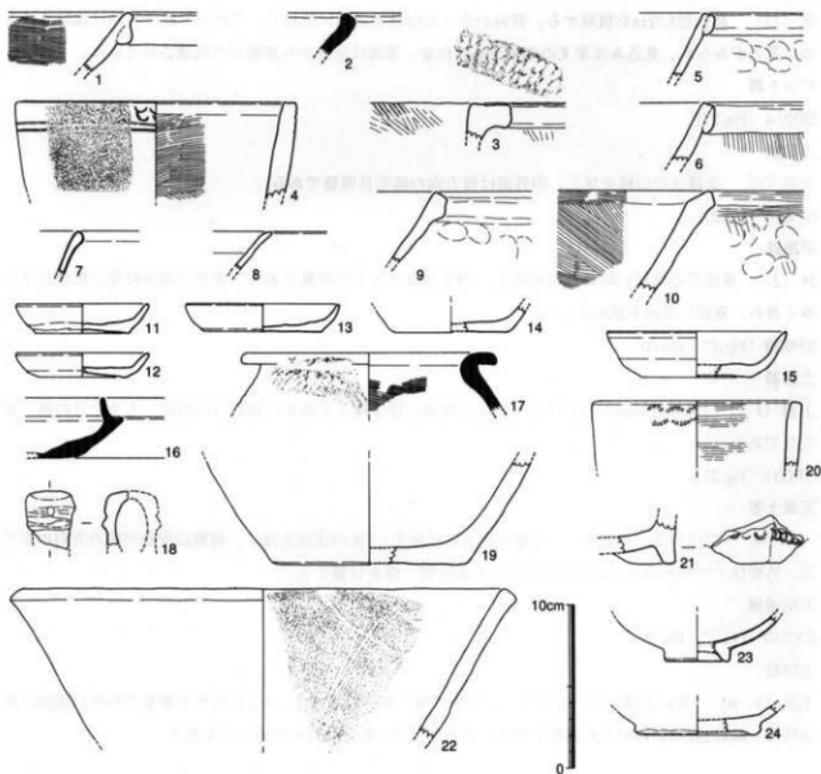


Fig.27 ピット・不明遺構・表土出土遺物実測図 (1/3)

## 土師器

小皿 (11~13) 11~13は糸切りで、口径8.2~9.4cm、底径5.3~7.4cm、器高1.5~1.8cmを測る。

杯 (14・15) 共に糸切りで、14は底径6.8cmを測る。15は口径11.0cm、底径6.8cm、器高2.8cmを測る。

土鍋 (9) 玉縁状の口縁を呈し、外面に薄く煤が付着する。内面ナデ調整で外面に指頭圧痕が残る。

擂鉢 (22) 口径30.8cmを復元し、表面磨耗のため調整不明である。内面には7本単位の櫛目を斜め方向に施す。外面には薄く煤が付着する。

土製品 (18) 帽子部分が残る細片である。日露戦争時の兵隊を型取ったものと思われ、内部は空洞である。

## 瓦質土器

土鍋 (10) 口縁部は「く」の字状に外反し、内面は刷毛目調整、外面には指頭圧痕が残る。また、外面は薄く煤が付着する。素地は淡灰色で細砂粒が多く含まれる。

火鉢 (21) 方形状の火鉢になると思われる。脚部外面に菊花文の印刻を施す。内面は刷毛目、外面はナデ調整である。

香炉 (20) 口径12.8cmを測り、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部外面に菊花文の印刻を施す。内面は刷毛目で、外面は調整不明である。

鉢 (19) 底径11.9cmを復元する。表面磨耗のため調整不明で、胎土は砂粒を多く含む。

## 青磁

碗 (23) 高台径4.0cmを復元する。くすんだ緑色の透明釉を全面に施し、壘付は掻取っている。全体に貫入が入り、素地は灰色で黒色粒子を少量含む。外面の下位に鍋連弁がわずかに確認される。

## 白磁

碗 (24) 高台径7.7cmを復元し、青みがかった透明釉を施す。高台内は露胎で、素地は灰色で細砂粒を少量含む。

Tab.3 出土遺物一覧表①

【単位はcm, \*は復原値】

Fig.No.	遺構	名称	器種	口径	底径	器高	胴径	長さ	幅	厚さ	切離し区分 ヘラ	備考
10-1	SK002	土師器	小皿	*7.0	*5.0	1.65					○	
-2	*	*	*	*	*						○	
-3	*	白磁	皿		*5.7							
-4	SD003	土師器	坏	*11.8								
-5	SD010	陶器	甕									常滑・赤羽・中野:6a形式
11-1	SD006	土師器	小皿	*6.6	*5.2	1.35					○	
-2	*	*	*	*6.6	*4.4	2.0					○	
-3	*	*	*	*8.4	*6.5	1.75					○	
-4	*	*	坏	*10.2	*6.8	2.1~2.4					○	
-5	*	*	*	*12.2	*8.0	2.95					○	
-6	*	*	土鍋									山村: Ea
-7	SD017	青磁	碗		*5.2							
-8	*	石製品	撥鉢		*19.2							
12-1	SD020	土師器	小皿	*6.4	*4.8	2.3					○	
-2	*	*	*	*6.8	*4.3	1.75						
-3	*	*	*	*7.7	*5.4	2.15					○	
-4	*	*	*	*7.2	*5.3	1.8~1.9					○	
-5	*	*	*	*7.4	*5.3	1.5~1.9					○	
-6	*	*	*	*7.5	*5.5	1.9					○	
-7	*	*	*	*7.6	*5.3	1.6~2.1					○	
-8	*	*	*	*7.6	*5.7	1.8					○	口縁部内外面に油煙痕
-9	*	*	*	*7.7	*5.4	1.6~1.9					○	
-10	*	*	*	*8.0	*6.2	1.75					○	
-11	*	*	*	*8.0	*5.7	1.8					○	
-12	*	*	*	*9.0	*6.3	1.6~1.85					○	口縁部外面及び内面の一部に油煙痕
-13	*	*	*	*8.6	*6.5	1.15						
-14	*	*	*	*8.8	*6.5	1.5					○	
-15	*	*	*	*9.6	*8.1	1.05						
-16	*	*	*	*9.6	*8.5	1.1					○	
-17	*	*	*	*9.6	*8.3	1.25						
-18	*	*	*	*10.4	*9.4	1.3					○	
-19	*	*	*		*6.4						○	炭化物付着
-20	*	*	坏		*7.7						○	
-21	*	*	*		*7.5						○	
-22	*	*	土製品								○	内底部に穿孔(4穴)あり
-23	*	*	*								○	炭化物付着・中央に穿孔(1穴)あり
-24	*	*	坏	*9.6	*8.0	1.65					○	
-25	*	*	*	*9.9	*6.3	2.35~2.55					○	
-26	*	*	*	*10.0	*6.7	2.25					○	
-27	*	*	*	*10.0	*6.4	3.0					○	
-28	*	*	*	*10.2	*6.6	2.4~2.5					○	
-29	*	*	*	*10.5	*7.8	2.1~2.3					○	
-30	*	*	*	*10.7	*6.8	2.2					○	
-31	*	*	*	*10.7	*6.9	2.3~2.4					○	
-32	*	*	*	*10.8	*7.2	2.7					○	
-33	*	*	*	*11.0	*7.8	2.4					○	内面に油煙痕
-34	*	*	*	*11.0	*7.8	2.7					○	
-35	*	*	*	*11.2	*7.3	2.6					○	内外面に煤付着
-36	*	*	*	*11.4	*7.6	3.5					○	
-37	*	*	*	*11.6	*7.7	2.3~2.6					○	
-38	*	*	*	*11.6	*6.8	2.8					○	
-39	*	*	*	*11.8	*6.8	2.9~3.4					○	内面に炭化物付着
-40	*	*	*	*12.0	*7.4	2.9					○	
-41	*	*	*	*12.0								
-42	*	*	*	*12.2	*8.3	2.9					○	外面に煤付着
-43	*	*	*	*12.3	*8.1	3.1~3.4					○	内面に油煙痕
-44	*	*	*	*13.2	*8.0	2.4					○	

Tab.4 出土遺物一覧表②

【単位はcm、\*は復原値】

Fig.No.	遺構	名称	器種	口径	底径	器高	胴径	長さ	幅	厚さ	切離し区分		備考
											ヘラ	糸	
12-45	SD020	土師器	皿		*9.5					1.2	○	内外面に残付着	
-46	*	瓦器	残		*6.0								
13-47	*	土師器	土鍋									山村: Ea	
-48	*	*	*									*	
-49	*	*	*									*	
-50	*	*	*									*	
-51	*	*	*									*	
-52	*	*	*									*	
-53	*	*	*									*	
-54	*	*	*									*	
-55	*	*	*									*	
-56	*	*	*									*	
-57	*	*	*									*	
-58	*	*	*									*	
-59	*	*	*									*	
-60	*	*	*									*	
-61	*	*	*									*	
-62	*	*	*									*	
-63	*	*	*									*	
-64	*	*	*									*	
-65	*	*	*									*	
-66	*	*	*									*	
-67	*	*	*									*	
-68	*	*	*									*	
-69	*	*	*									*	
-70	*	*	*									*	
-71	*	*	*									*	
-72	*	*	*									*	
-73	*	*	*									*	
-74	*	*	*									*	
-75	*	*	*									*	
-76	*	*	*									*	
-77	*	*	*									*	
-78	*	*	*									*	
-79	*	*	*									*	
-80	*	*	*									*	
-81	*	*	*									*	
-82	*	*	*									*	
14-83	*	*	*		*32.7							*	
-84	*	*	*		*33.2							*	
-85	*	*	*		*39.4							*	
-86	*	*	*		*40.2							*	
-87	*	*	*		*42.2							*	
-88	*	*	*		*42.2							*	
-89	*	*	*		*43.6							*	
15-90	*	*	*		*43.4							*	
-91	*	*	*		*44.3							*	
-92	*	*	*		*44.6							*	
-93	*	*	*		*31.2							山村: Eb	
-94	*	*	*		*31.2							山村: FI	
-95	*	*	*									*	
-96	*	瓦質土器	擂鉢	*29.4								山村: ANa?	
-97	*	*	*		*16.6								
-98	*	*	*										
-99	*	*	*		*14.1								
-100	*	*	*										
-101	*	陶器	擂鉢									備前、IV期	

Tab.5 出土遺物一覧表③

【単位はcm、\*は復原値】

Fig.No.	遺構	名称	器種	口径	底径	器高	胴径	長さ	幅	厚さ	切離区 分係	備考
16-102	+	陶器	鉢鉢	*30.4								備前・V期
-103	+	須恵器	甕									
-104	+	陶器	甕									
-105	+	+	+		*13.3							
-106	+	須恵器	鉢									東播磨
-107	+	+	+	*28.0								+
-108	+	陶器	甕		*14.0							
-109	+	灰釉陶器	瓶子		*13.6							瀬戸
17-110	+	土師器	甕									
-111	+	+	鉢									
-112	+	瓦質土器	鉢	*23.4								山村：AⅡc
-113	+	+	+	*22.0								山村：AⅠa
-114	+	+	+	*26.2								+
-115	+	土師器	こね鉢	*42.4								山村：B
-116	+	+	火鉢	*18.0	*14.3	4.2						山村：BⅡ
-117	+	瓦質土器	火鉢	*17.6								山村：AⅡ
-118	+	+	+	*20.6	*14.3	5.4						山村：BⅠa
-119	+	+	+	*20.0								山村：BⅠa?
-120	+	+	+		*14.4							山村：B?
-121	+	+	+									山村：BⅠc
-122	+	+	+	*27.4	*20.2	8.0						+
-123	+	土師器	火鉢	*32.6	*28.5	8.2						山村：BⅠa
-124	+	瓦質土器	香炉	*12.1								山村：D
18-125	+	+	火鉢	*36.0								山村：AⅡ
-126	+	+	+	*38.2								+
-127	+	+	+	*38.8								+
-128	+	+	+		*31.8							+
19-129	+	+	風炉	*15.2								山村：EⅢ
-130	+	+	+	*16.4								+
-131	+	+	+	*18.2								+
-132	+	+	+	*26.4								+
-133	+	+	茶釜				*28.0					山村：AⅡa
-134	+	+	+				*29.1					+
-135	+	+	+				*32.0					+
-136	+	+	+									+
20-137	+	+	+				*32.8					+
-138	+	+	+									+
-139	+	+	+	*15.2								+
-140	+	+	+	*16.0								+
-141	+	+	+	*14.8			*28.6					+
-142	+	+	+	*17.0			*15.9					+
21-143	+	青磁	皿									
-144	+	+	+									輪花
-145	+	+	小碗	*7.9	*4.4	3.6						
-146	+	+	碗									龍泉廬系、横田・森田：I-5
-147	+	+	+									同安廬系、横田・森田：I-1-b
-148	+	+	皿									
-149	+	+	壺?									
-150	+	+	碗									龍泉廬系、上田：C-II-a
-151	+	+	+	*12.4								
-152	+	+	+	*14.6								龍泉廬系、上田：C-II-a
-153	+	+	+	*16.0								龍泉廬系、上田：C-II-b
-154	+	+	+		5.1							龍泉廬系、上田：E
-155	+	+	+	*6.1								龍泉廬系、横田・森田：II?
-156	+	+	+	*6.0								龍泉廬系、上田：C-II-c
-157	+	+	+		5.9							
-158	+	+	+		5.4							龍泉廬系、上田：B

Tab.6 出土遺物一覧表④

【単位はcm、\*は復原値】

Fig.No.	遺構	名称	器種	口径	底径	器高	胴径	長さ	幅	厚さ	切離し区分		備考
											へろ	糸	
21-159	SD020	青磁	碗		*5.2								高麗?、砥石として転用
-160	*	白磁	皿		*6.2								森田：Ⅸ
-161	*	*	*		5.8	3.05							森田：Ⅸ群
-162	*	*	*	*11.0	5.7	3.2							森田：Ⅲ-1
-163	*	*	碗	*12.8									森田：Ⅳ
-164	*	*	*										*
-165	*	*	*										*
-166	*	*	*		*6.9								横田・森田：Ⅷ・1
-167	*	*	*										横田・森田：ⅤαⅢ
-168	*	*	*		*6.2								横田・森田：Ⅴ-4・bcⅥ
-169	*	染付	碗		3.9								
-170	*	*	*		*3.9								
-171	*	*	*			1.4							小野：C群
-172	*	*	蓋	*14.5									
-173	*	*	皿	*5.0									小野：B群
-174	*	*	*		*2.4								小野：C群
-175	*	*	*		*4.2								*
-176	*	*	*	*10.2	*3.5	2.6							*
22-177	*	石製品	石鏝										滑石製、木戸：Ⅲ類-c
-178	*	*	*										滑石製、木戸：Ⅲ類-d
-179	*	*	砥石					22.5	5.5				
-180	*	*	*					10.8	6.6				
-181	*	*	挽臼										
-182	*	*	*				*29.8						
-183	*	銅製品	古鏡				2.4						浄化元寶
-184	*	*	*				*2.4						*
-185	*	*	把手							0.4			
-186	*	瓦	平瓦										
23-187	*	石製品	五輪塔										火輪
-188	*	*	*										*
-189	*	*	*										水輪
-190	*	*	*										*
25-1	SD030	須恵器	鉢										東播系
-2	*	青磁	碗										龍泉窯系、横田・森田：Ⅰ-5
-3	*	白磁	碗										
-4	*	*	*										
-5	*	青磁	皿		*4.2								同安窯系、横田・森田：Ⅰ-1・b
-6	*	石製品	石鏝										滑石製
-7	*	*	*		*39.8								滑石製、木戸：Ⅲ類-e
-8	SD046	土師器	香炉		*10.4								山村：D類
-9	SD050	*	小皿	*7.8	*5.8	1.25						○	
-10	*	*	*	*8.8	*7.0	1.25							○
-11	*	*	*										○
-12	*	*	*	*10.4	*8.7	1.65							○
-13	*	*	*	*10.8	*9.5	1.35							○
-14	*	白磁	碗										龍泉窯系、横田・森田：Ⅳ-2
-15	SD060	須恵器	播鉢										
-16	*	石製品	五輪塔										火輪
26-1	SK007	縄文土器	深鉢										曾畑式
-2	*	*	*										*
-3	*	*	*										*
-4	*	*	*										*
-5	*	*	*										*
-6	*	*	*										野口式
-7	SK008	土師器	小皿	8.9	6.8	1.6~1.8						○	
-8	*	*	*	*8.7	*6.6	1.7							○
-9	*	*	坏	*14.2	*9.5	2.9~3.3							○

Tab.7 出土遺物一覧表⑤

【単位はcm, \*は復原値】

Fig.No.	遺構	名称	器種	口径	底径	器高	胴径	長さ	幅	厚さ	切離区分 へろ系	備考
26-10	SK008	石製品	砥石					8.3	1.15			
-11	SK025	土師器	土鍋									山村：Ea
-12	*	瓦質土器	擂鉢									山村：A I
-13	SK063	瓦器	甕									
-14	*	土師器	土鍋									山村：Ea
-15	*	青磁	碗		*5.7							龍泉原系、上田：E
27-1	SP014	土師器	土鍋	*22.6								山村：Ea
-2	*	須恵器	鉢									東播系
-3	SP029	土師器	土鍋									山村：A
-4	SP081	瓦質土器	火鉢	*17.2								山村：D
-5	SX040	土師器	土鍋									山村：Ea
-6	*	*	*									*
-7	*	青磁	碗									
-8	*	白磁	碗									龍泉原系、横田・森田：Ⅷ
-9	表探	土師器	土鍋									山村：Ea
-10	*	*	*									山村：Bb
-11	*	*	小皿	*8.2	*5.8	1.8					○	
-12	*	*	*	*8.2	*5.3	1.5					○	
-13	*	*	*	*9.4	*7.4	1.7					○	
-14	*	*	坏		*6.8						○	
-15	*	*	*	*11.0	*6.8	2.8					○	
-16	*	須恵器	坏			3.7						
-17	*	*	甕	*14.8								
-18	*	土師器	土製品									兵隊
-19	*	瓦質土器	鉢		*11.9							山村：E
-20	*	*	香炉	*12.8								山村：D
-21	*	*	火鉢									山村：C
-22	*	土師器	擂鉢	*30.8								山村：A I a
-23	*	青磁	碗		*4.0							龍泉原系、上田：B
-24	*	白磁	碗		*7.7							

## 【註】

本表に記載した分類は、下記の文献によっている。

《中世雑器》山村信基「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990

《青磁》横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集4』1978  
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982

《白磁》森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982

《染付》小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982

《備前焼》岡田忠彦『備前焼』『考古学ライブラリー60』平成3年

《常滑焼》赤羽・中野「生産地における編年について」『中世常滑焼をめぐって』シンポジウム資料集 1994

《石鍋》木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』1993

## IV. 総 括

長崎坊田遺跡の成果については前述のとおりで、出土遺物から縄文～中世末期に及ぶものであることがわかる。ただ、調査によって調査区内は著しく削平を受けていることは明らかで、遺構として把握できたのは溝や欄列、掘立柱建物、土塀などにとどまり、主体となるのは中世中～末期と思われる。

ここでは、主要となる遺構や遺物について概述し、まとめとしたい。

### 1. 遺構 (Fig.28)

当遺跡から確認した主要となる遺構のなかでは、調査区Bから検出したSD020がある。今回の調査でSD020は館をとりまく区画溝であったことが想定されるため、館跡に関連する遺構について触れることにする。

はじめに、SD020の規模を今一度整理しておくことと次のとおりである。SD020は、調査区に制限があったため全体の3/4程度しか確認することができず、溝の幅は1.74～3.81m、深さは0.43～0.72m、溝の短辺(南北間)は心々で約25.0m、長辺(東西間)は心々で約32.0mであった。このことから溝によって区画された面積は約800m<sup>2</sup>と推測される。SD020の平面プランは、ほぼ「コ」の字形を呈し、溝の北西部及び南東部コーナーは緩やかなカーブを描き、南西部コーナーは屈曲する。更に、溝の北側東西溝の中央部は極端に狭くなっており、後に触れる出入口を想定させるプランになっている。SD020の方位の振れは、北側東西溝はN-66°-W、南側東西溝はN-75°-W、西側南北溝はN-75°-Eを示す。

SD020の土層断面をみてみると、溝の北辺・西辺では外側から明黒灰色粘質土(黄色粘土のブロック及び粒子を多く含む)が流れ込んでいるのに対し、南辺では内側方向から流れ込んでいる状況であり、現在のところ、北辺・西辺は溝の外側、南辺は溝の内側に土壘が設置されていた可能性があったものと思われる。

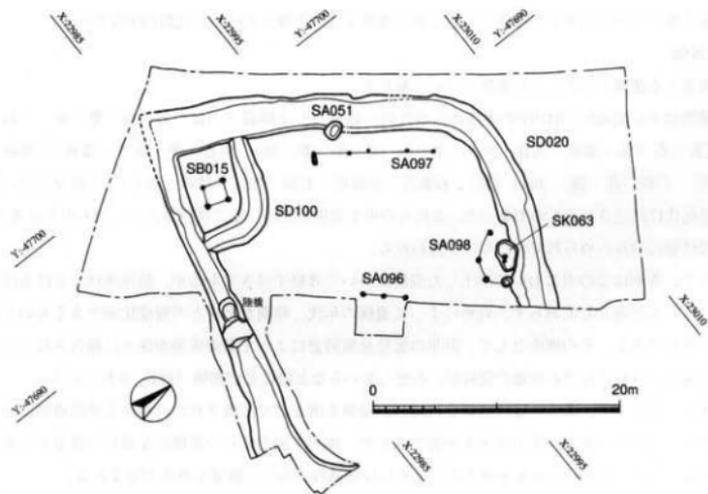


Fig.28 館跡関連遺構図 (1/400)

ところで、SD020南中央部では、溝に堆積した通常の埋土とは明らかに違う変化がみられた。人為的に溝が埋められており、断面はほぼ台形状を呈していた。このことから出入口として使用された陸橋が考えられる。一方、先に触れた陸橋の向かい側にあたるSD020の北側東西溝の中央部は、溝の幅が極端に狭くなっていて、陸橋と同じく出入口部分であった可能性が考えられる。ちなみに、この部分には今ひとつ性格のわからないSK063・SA093が検出されている。SK063・SA093からは出入口を想定させるような良好な資料は得られておらず、一連の出入口に関連する施設かどうかはわかっていない。

次に、内部施設について触れてみる。SD020西側の内縁に沿うようにSA097を検出した。該期における館跡のなかには、外敵から守るための防御策として、土塁・溝・塀などの防御施設が考えられる。当館跡においても、土塁と共に塀が設置されていた可能性が考えられるが、調査区内は削平を著しく受けており明確な遺構とは言い難く、また、周囲における構列も検出していないため、塀をとらえていた可能性は極めて薄いものと思われる。

ところで、このSA097とほぼ同方位を示すSA096は、SD020に区画されたエリアのほぼ中央部に位置する。SA096はP1～P3を検出した構列状に並ぶ遺構である。調査区を拡張して周囲を確認したが、これにともなう遺構は検出できなかった。仮に、SA096が建物であったと想定した場合、配置的にみるとSD020のほぼ中央部に位置し、中心的な建物であったことが考えられる。先述したように、調査区内は著しく削平を受けていたため詳細な所見を得ることができなかったことは残念である。

館に関連する建物にはSB015がある。SD020の南西部コーナーにSD100によって区切られたエリア内に存在し、このエリアのほぼ中央辺りに配置される。建物の方位はN-19°-Eをとり、規模と配置からは中心的な建物（母屋）とは考え難く、むしろ脇屋的な建物として捉えられるものである。

この他、生活の匂いを感じさせる遺構に井戸がある。調査では明確に井戸としてとらえられる遺構は確認できなかったが、取上げてあげるとするならばSK051が考えられる。掘削時においては唯一湧き水を認めた遺構で、最下層に青灰色粘質土が堆積しており出土遺物は他の土壌と比べると比較的少なかった。

## 2. 出土遺物

館に関連する遺構から出土した遺物について触れる。

出土遺物は主にSD020・SD100の各層から散在的に認めた。土師器（小皿・皿・坏・甕・鉢・こね鉢・火鉢・瓦質土器（鉢・播鉢・火鉢・風炉・香炉）、須恵器（甕・鉢）、陶器（甕・瓶子・播鉢）、青磁（皿・碗・梅壺）、白磁（皿・碗）、染付（碗）、石製品（五輪塔・石鍋・挽臼・播鉢・砥石）、古銭などで、全般的には16世紀代に比定されるものであった。これらの出土遺物は庶民一般に使用されていたものとは考え難く、一定の階級層にのみ占められていたものと思われる。

ところで、本来はこの項において出土した資料について考察すべきであるが、筑後地域における該期土器の体系はほとんど確立しておらず、資料によって遺構の年代、時期などがどの程度比定できるものかわからないのが現状である。その理由として、近年の緊急発掘調査によって調査成果が徐々に報告されてはいるものの、圧倒的に該期における在地の資料が、不足しているなどのことが指摘（註1）されている。

当遺跡などのように、ある一定の空間を占地し、境界を溝などで区画されたいわゆる単位遺跡における出土遺物については、本来、使用状況を把握する上で、極めて説明的かつ客観的な資料の提示が可能となるはずである。しかしながら、結果を導き出すためには諸過程において慎重な対応が望まれる。

このため、当遺跡から出土した遺物についてはTab.3～7に記載した土器の分類表を用い、出土遺物の傾向については周辺地域における状況を踏まえた上で、あらためて別の機会に検討したいと思う。

### 3. まとめ

以上、当遺跡から検出した主要なものの内、館跡に関連した部分について概説してきた。

これまで述べてきたことを要約すれば次のとおりである。

- 1) 館跡は、北方180mの山ノ井川と南方700mの花宗川の西流する2河川に挟まれる標高7.3m程度の扇状地性低地上に立地する。
- 2) 館跡を区画する溝（SD020）は短辺（南北間）約25.0m、長辺（東西間）約32.0m、面積は約800m<sup>2</sup>と推測され、SD020の南西部コーナーはSD100によって区画されている。土塁はSD020の北辺・西辺は外側、南辺は内側へ土塁を巡らせていたと思われる。更に、SD020東西溝の中央部には出入口があったと考えられる。
- 3) 建物はSD100によって区切られたエリアで、1×1間の掘立柱建物、1棟を確認したにすぎない。



Fig.29 筑後市周辺の荘園位置図

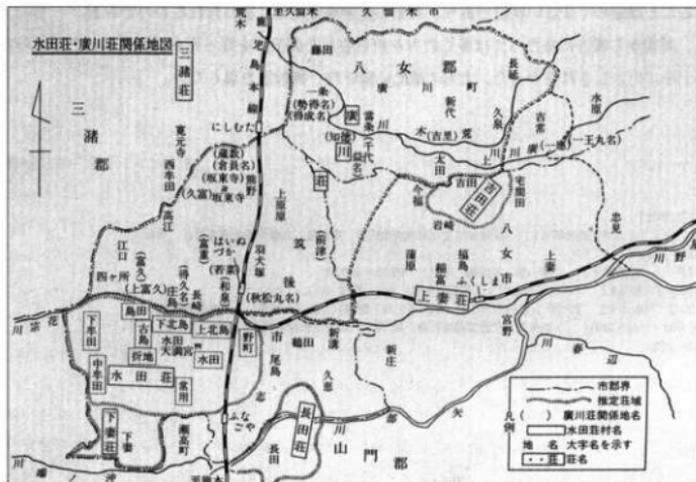


Fig.30 水田荘・廣川荘関係地図

4) 遺物は在地土器のほか、東播、備前、瀬戸、常滑などの国産陶器と中国陶磁器、朝鮮陶磁器など海外からの輸入貿易陶磁器が出土し、出土傾向から館跡が中心となるのは16世紀代と比定される。

筑後市周辺にみえる荘園 (Fig.29・註2) は、三瀬郡 (三瀬荘・青木荘・夜明荘・原田荘・安武荘)、上妻郡 (上妻荘・広川荘・河合荘・河崎荘・紫部荘・草野荘・吉田荘・忠見別符・黒木荘)、下妻郡 (下妻荘・水田荘)、山門郡 (小河荘・御深荘・瀬高上荘・瀬高下荘・瀬高横手荘・本吉荘・飯得荘・長田荘・坂田荘・石田保・鷹尾別符) で、荘園についての詳細は既に筑後市史によって記載されている。これによると、当地は広川荘内の最南端部に位置づけられ、南部の水田荘と隣接していたことがわかる (Fig.30)。広川荘と水田荘との推定境界ラインは当地から南方700mのところまで西流する花宗川にはほぼ沿うようであり、このことから、当館跡の防衛線は南部ということがわかる。

さて、近年の発掘調査によって、周辺の荘園に関係する地名 (Fig.30・註2) 付近に、中世の館跡と思われるような遺構を確認しているため、ここで紹介しておく。

まず、当地の北部にあたる「広川荘高江」付近では、平成元年度 (1989) に調査した高江遺跡 (註3) が想定される。遺跡からは2×4間以上の総柱の掘立柱建物が確認されており、調査担当者は13世紀代を比定し、有力者の居宅か、役所級の建物の可能性があることを示唆している。また、「広川荘若菜」にあたる地区からは、平成4年度 (1992) に調査した若菜森坊遺跡がある。ここからは方形に巡る区画溝 (断面形状はV字) を確認し、多くの中国陶磁器 (龍泉窯系青磁ほか) などを認めている。更に区画された内部からは、少なくとも4×6間以上 (推定) の掘立柱建物を複数棟検出している。「水田荘下北島」では、平成4年度調査 (1992) の下北島掘引遺跡がある。調査では、平面プランが隅丸形状を呈した区画溝を検出し、少量ではあるが中国陶磁器 (越州窯系青磁ほか) などを認めている。なお、若菜森坊遺跡と下北島掘引遺跡については、現在整理作業途中であるため、ここでは詳細な記述は避けておく。ところで、広川荘と水田荘の境界付近には、「・・屋敷」などの小字名がいたるところでみられることを参考までにあげておく。

現在のところ、史料にみる荘園関係地名と発掘調査成果との整合性は、まだまだ大きな開きがあるため、断定されることは極めて少ない状況であり、将来の発掘調査成果に委ねられるものである。

最後に、調査から報告にあたっては多くの方々から有益な御教示を賜ったが、担当者の力不足のため、その成果を十分に生かしきれなかった。大方の厳しい御叱咤、御教示を賜りたい。

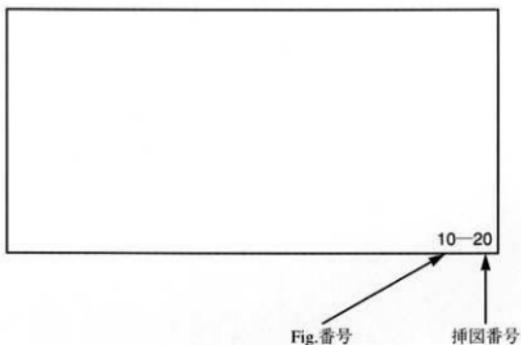
【引用文献並びに脚註】

- (註1) 白木 守 「安武地区遺跡群集」 「久留米市文化財調査報告書 第87集」久留米市教育委員会 1994  
PP115～PP132
- (註2) 松崎英一 「筑後市史」 「第一巻 第四編 中世」 PP393～PP688  
Fig.29は「筑後市史」 PP418 「竹内理三「荘園分布図」下巻 筑後 (6)」、  
Fig.30は「筑後市史」 PP520 「筑後国水田荘・広川荘史料」附図の図面を抜粋し、一部改編した。
- (註3) 木見秀徳 「高江遺跡」 「筑後市文化財調査報告書 第7集」 筑後市教育委員会 1994  
PP29～PP33

# 写真図版

## 凡例

遺物の写真図版右下の番号は、  
以下の要領である。

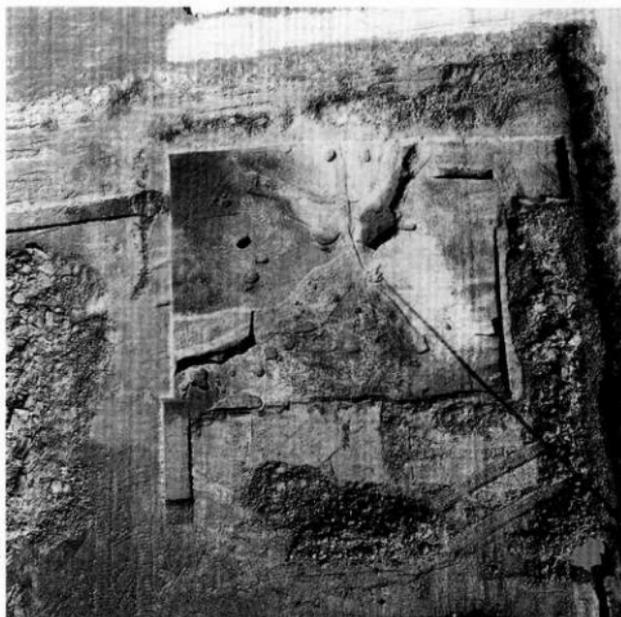




長崎坊田遺跡  
遠景（北から）  
空中写真



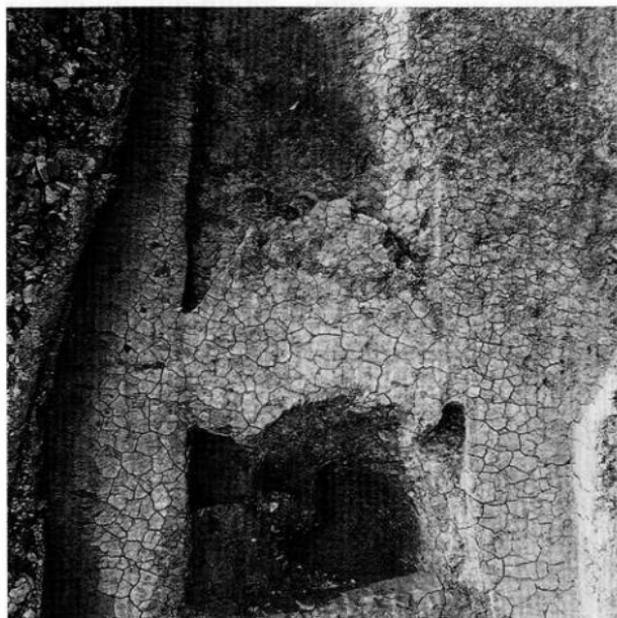
調査区全景  
（真上から：左が北）  
空中写真



調査区A  
(真上から：上が北)  
空中写真



調査区B  
(真上から：左が北)  
空中写真



SD020陸橋部  
(真上から)  
空中写真



SA098・SK063  
(真上から)  
空中写真



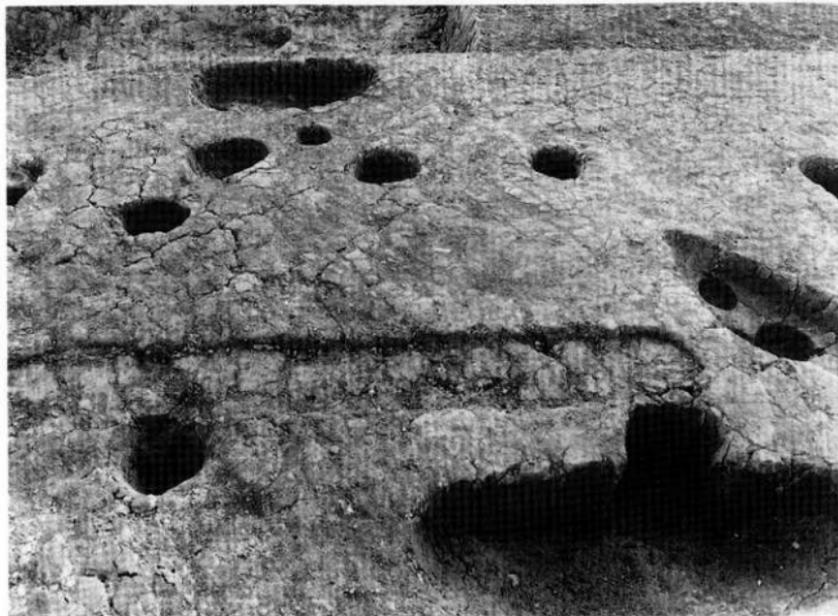
SDD020土層断面a-a' (北から)



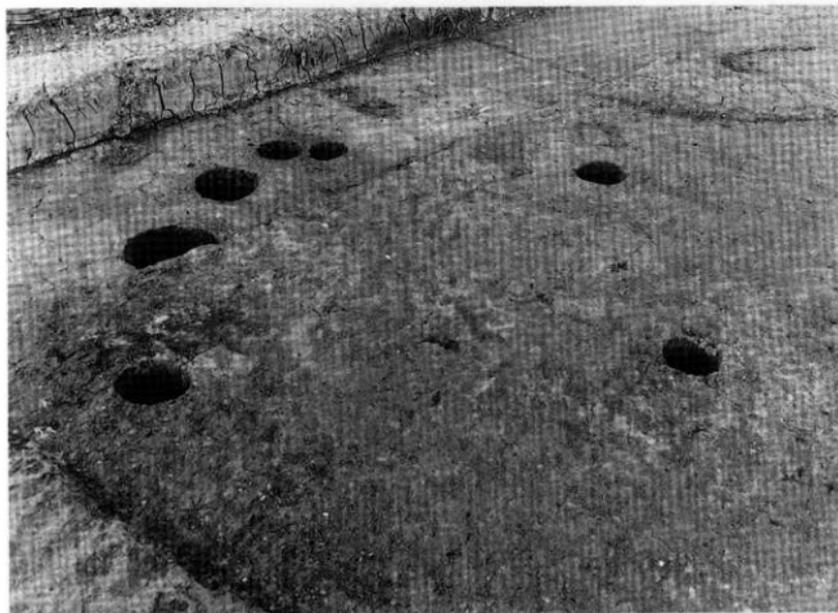
SDD020土層断面b-b' (西から)



SDD020土層断面c-c' (西から)



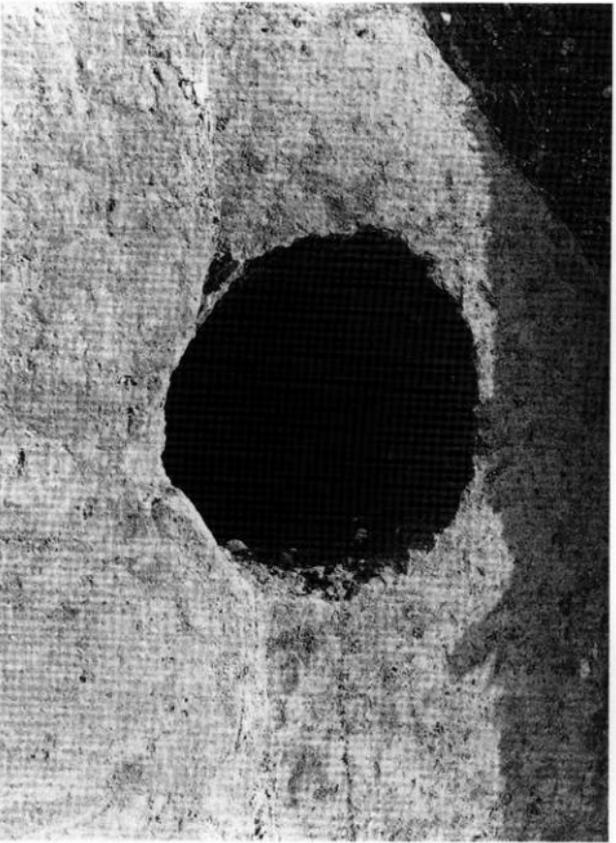
SB015 (南から)



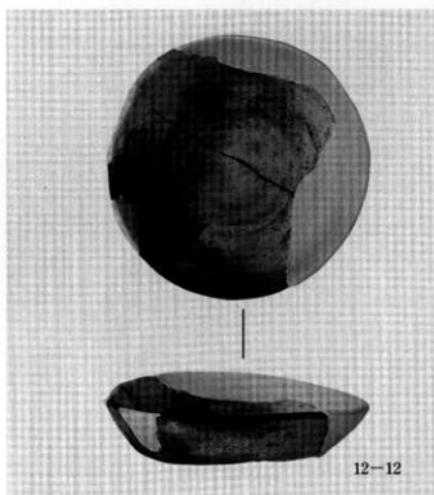
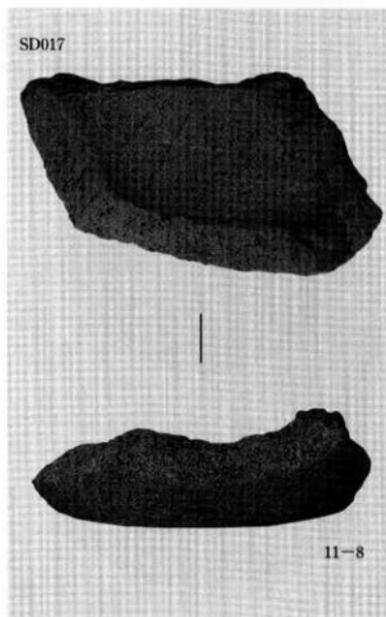
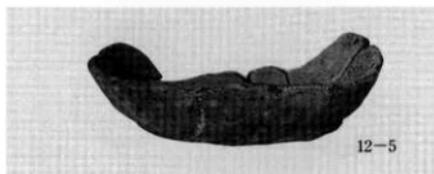
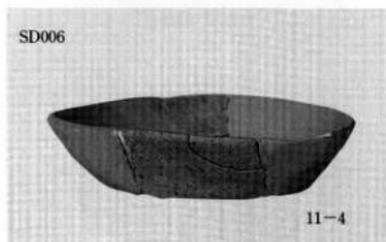
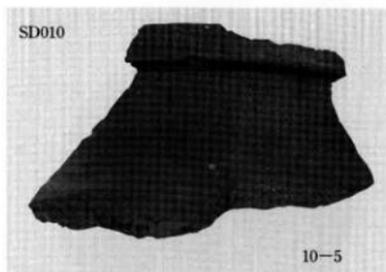
SB035 (南東から)

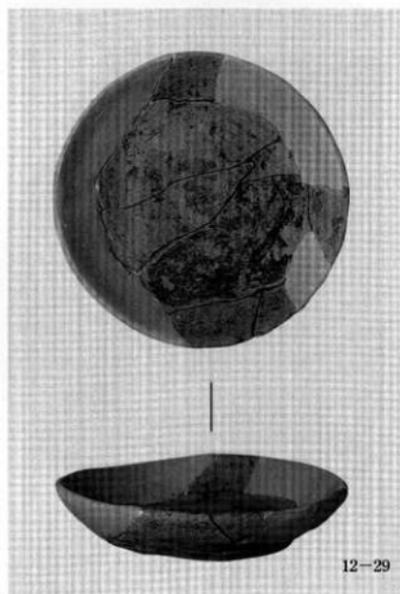
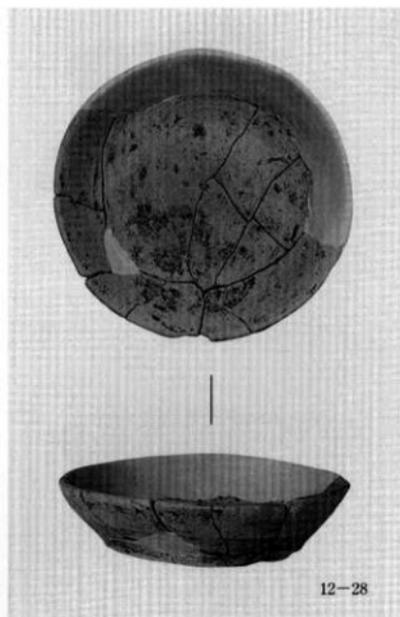
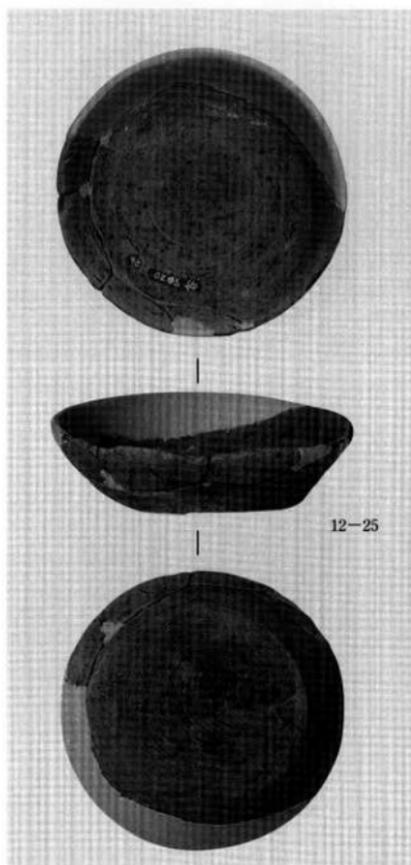
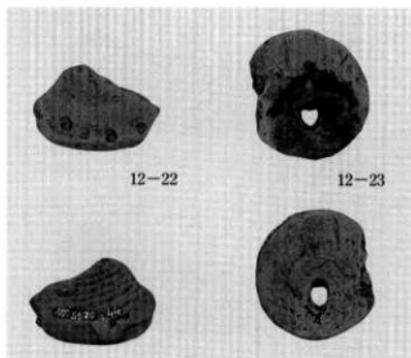


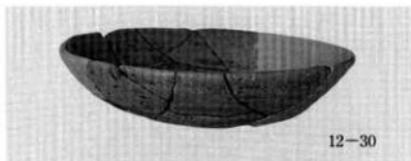
SK025・SK051 (西之5)



SK070 (東之5)



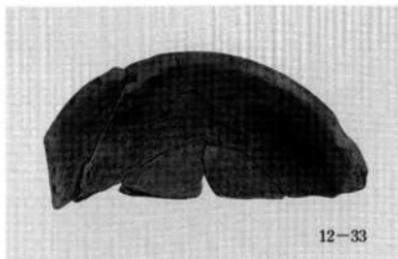




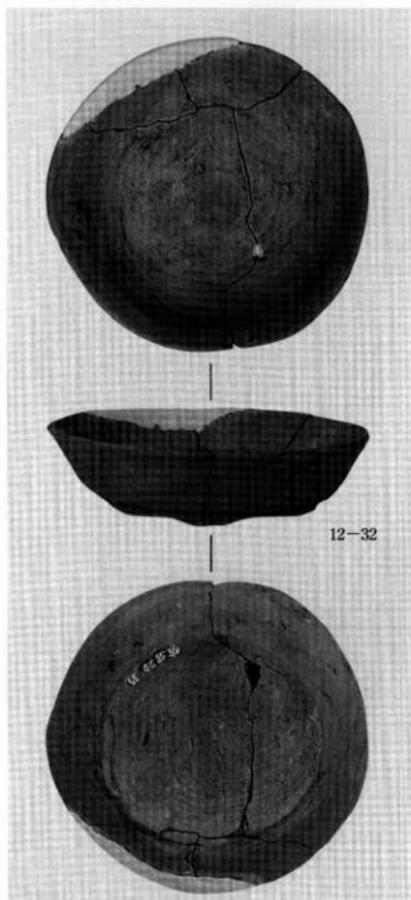
12-30



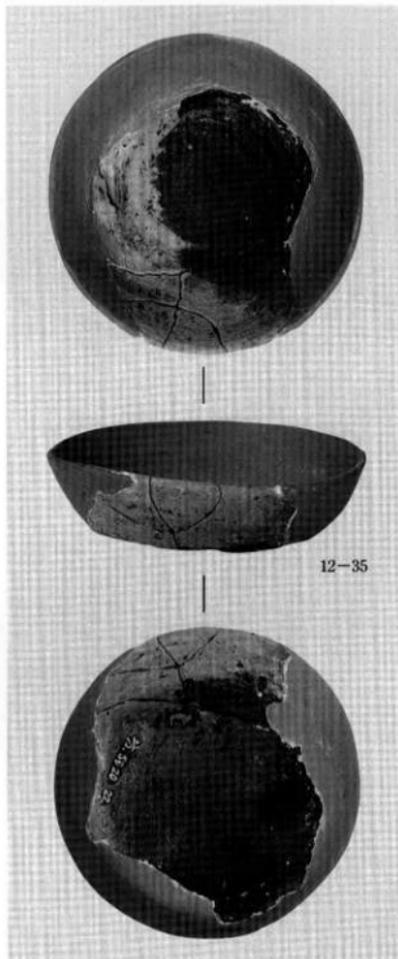
12-31



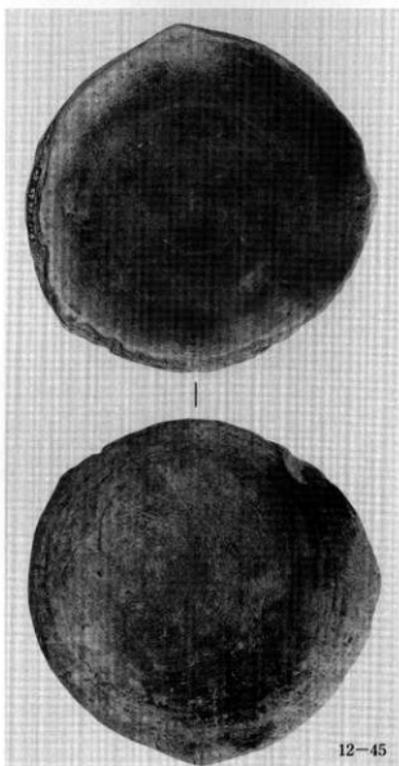
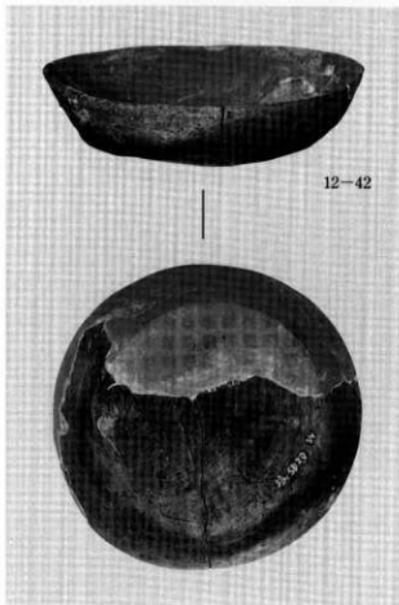
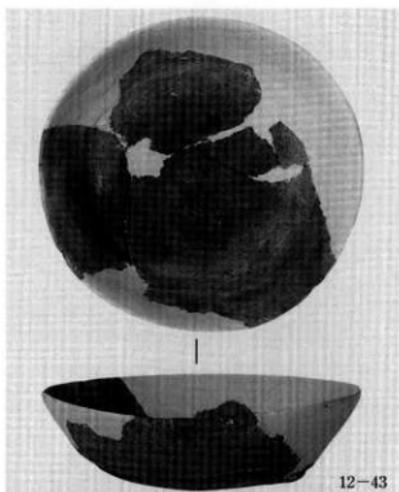
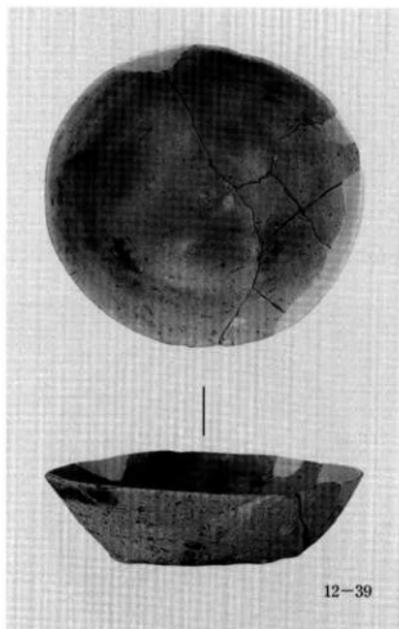
12-33

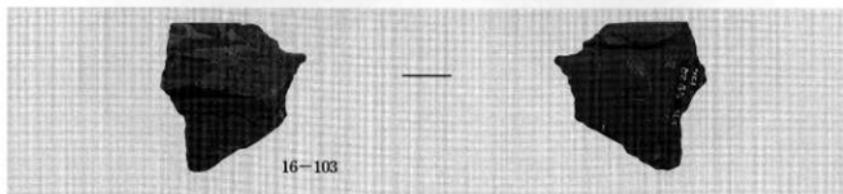
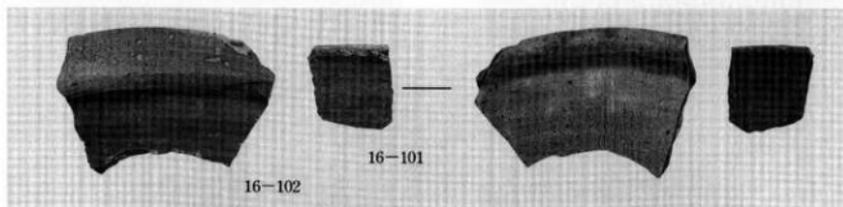
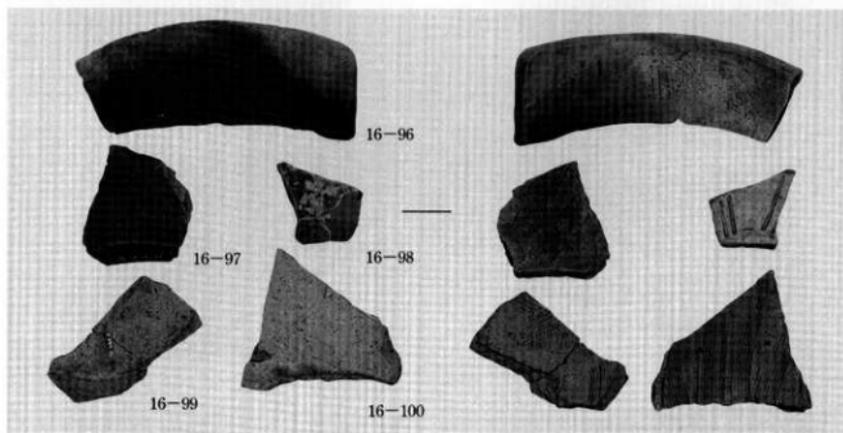
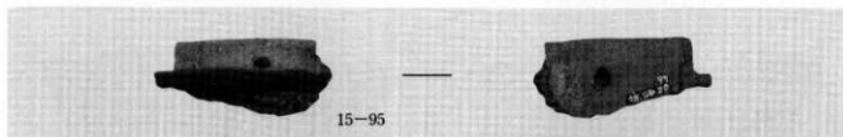
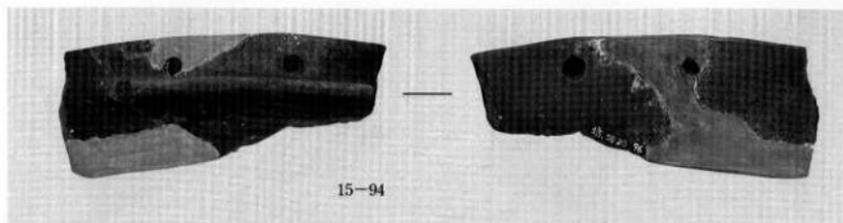


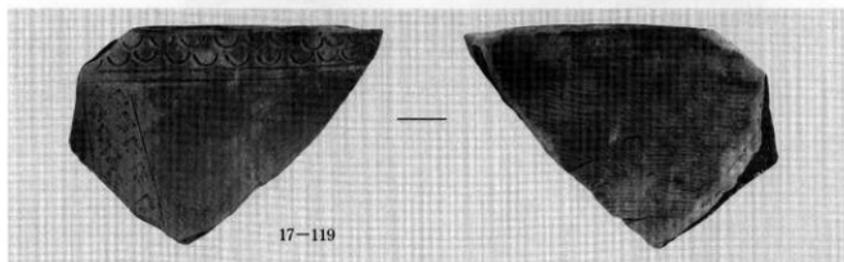
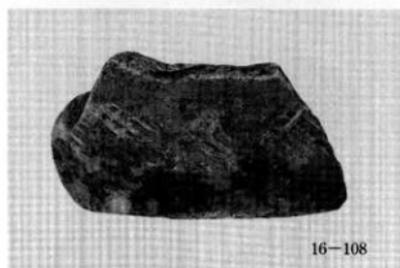
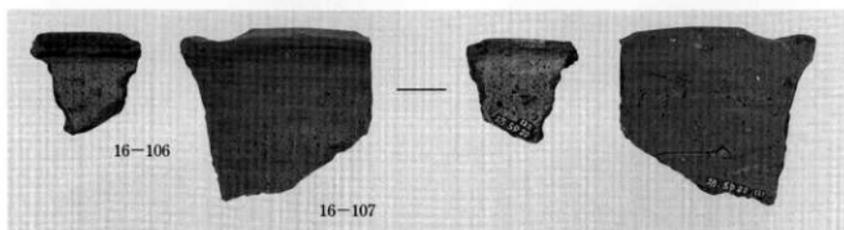
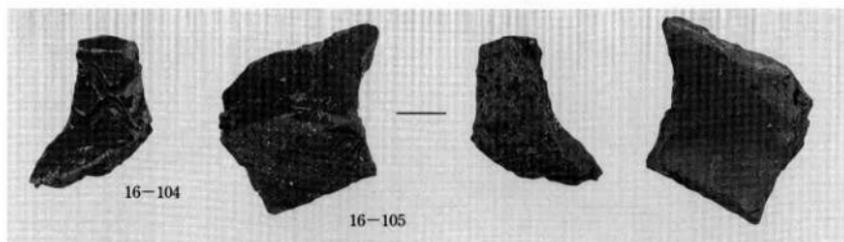
12-32

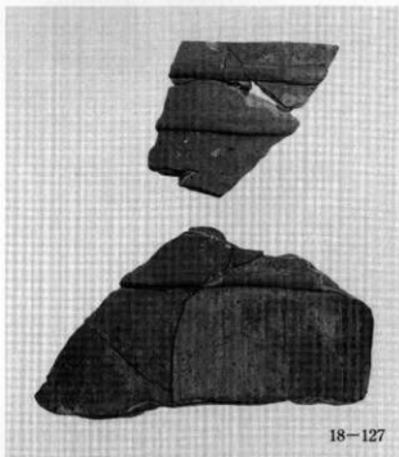
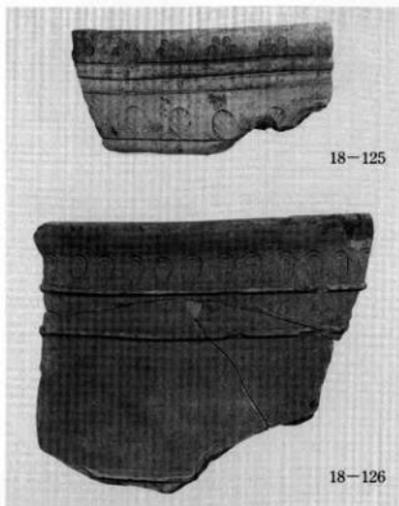
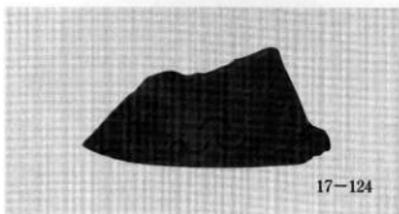
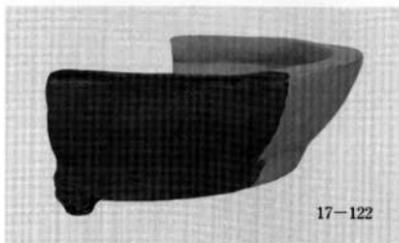
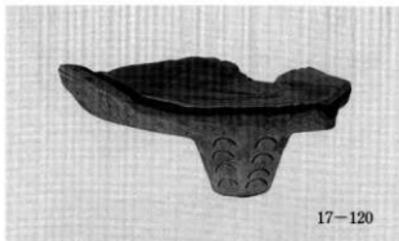


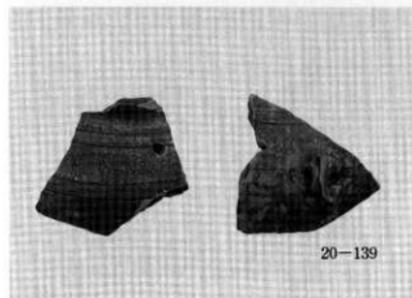
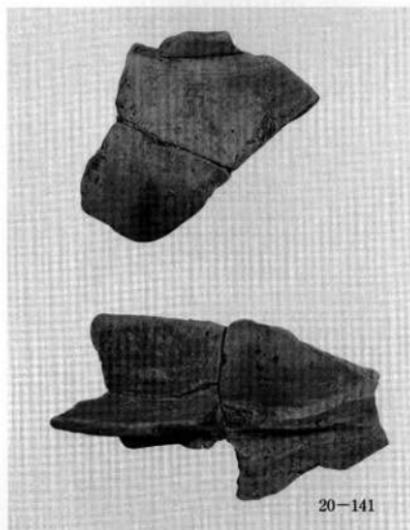
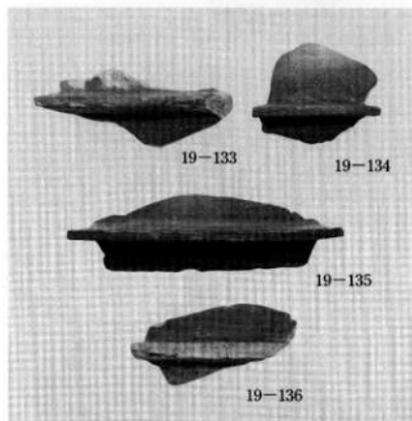
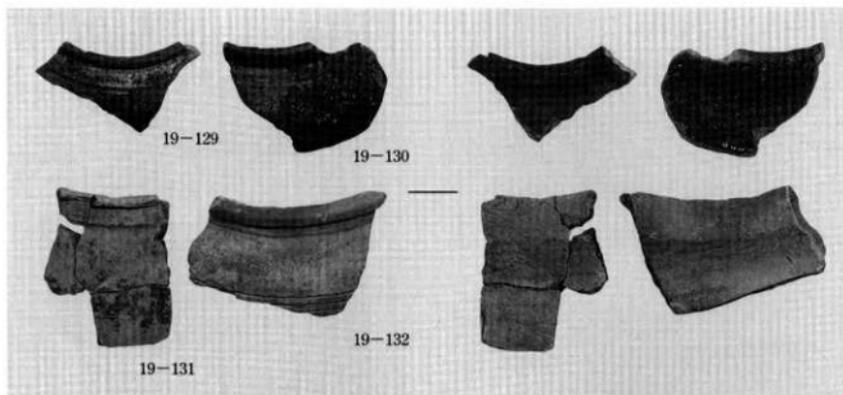
12-35

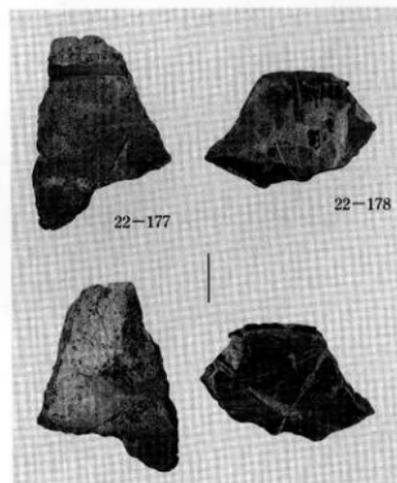
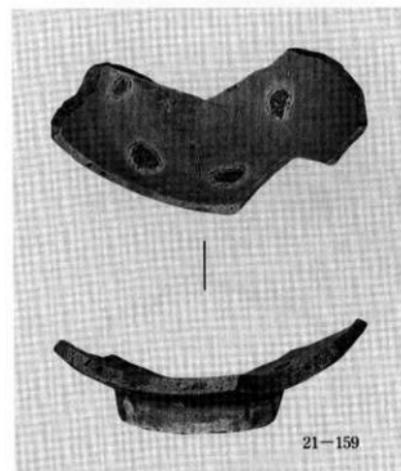
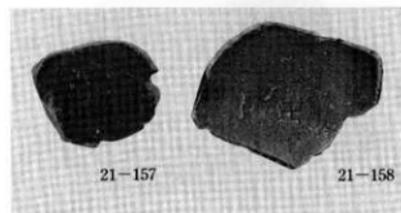
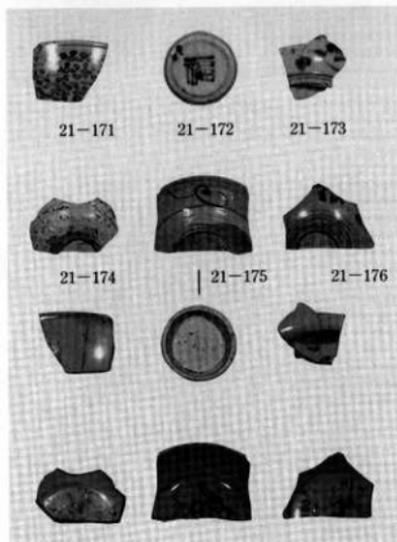
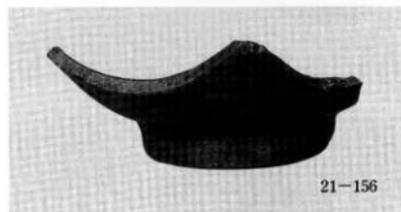
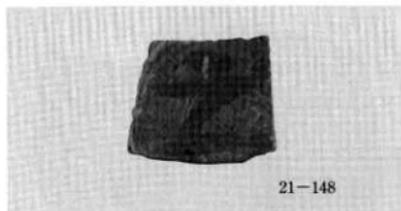


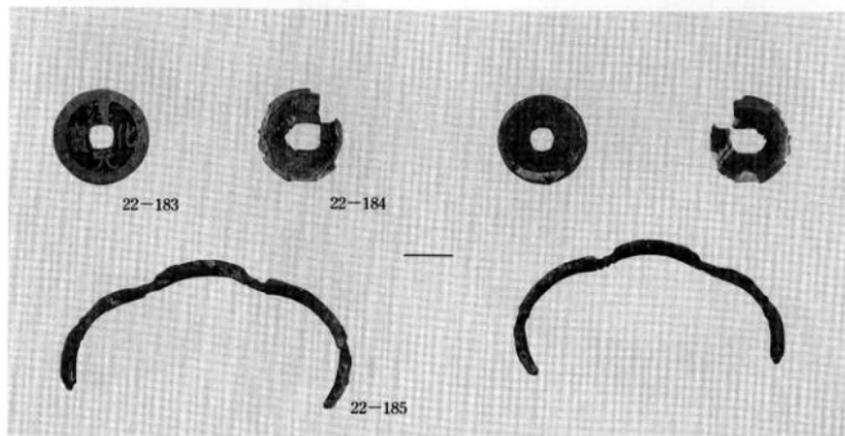
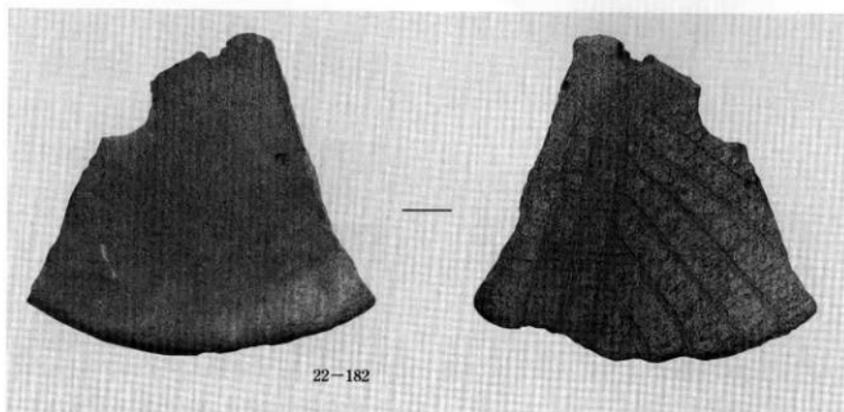
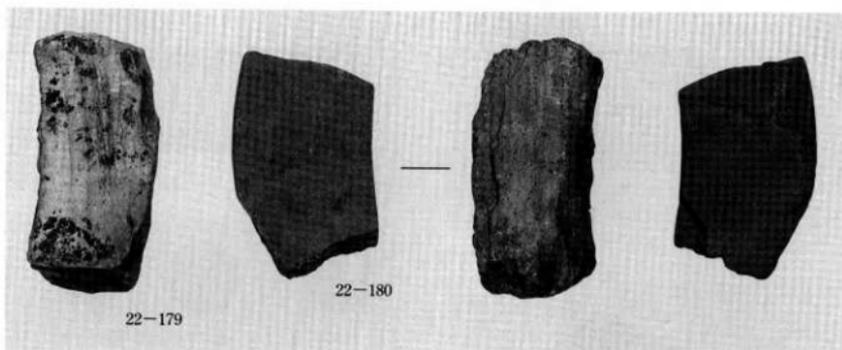


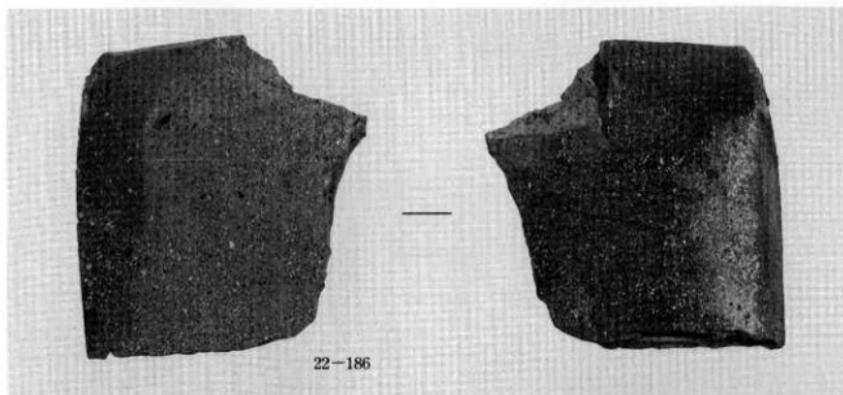








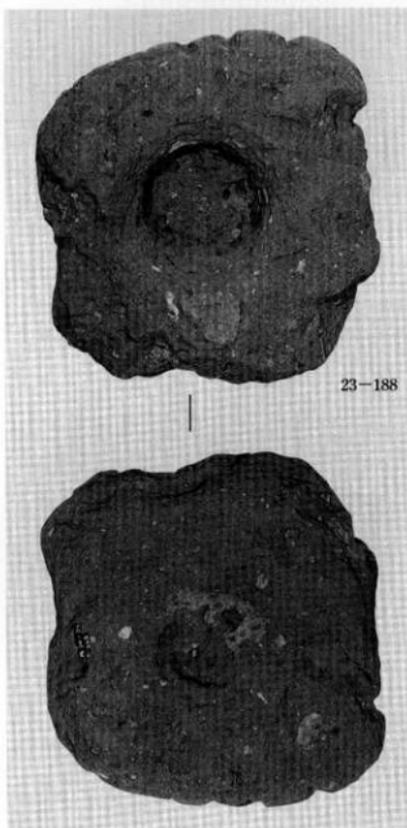




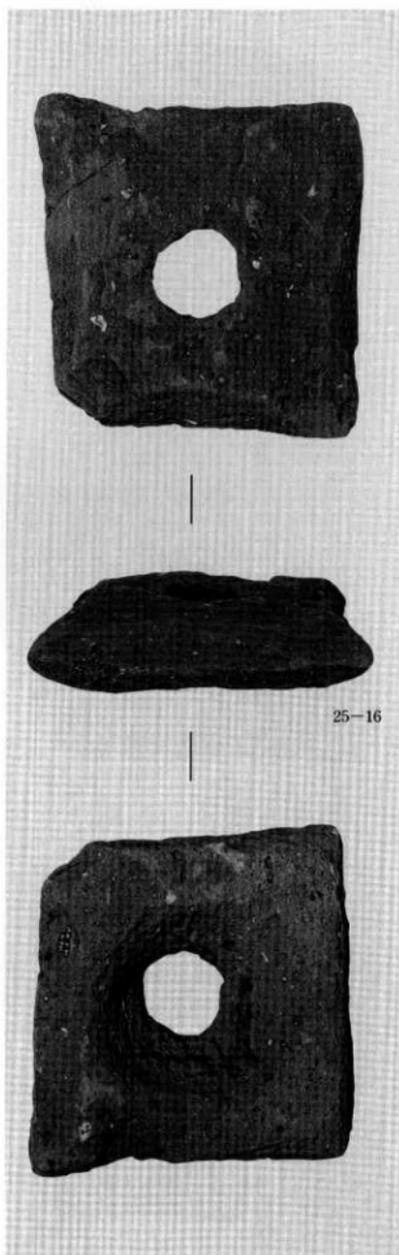
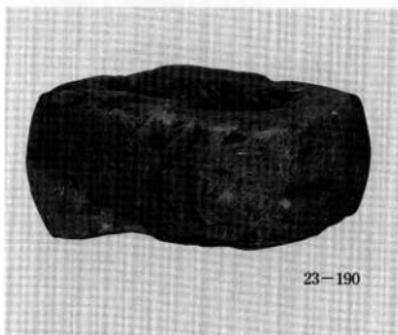
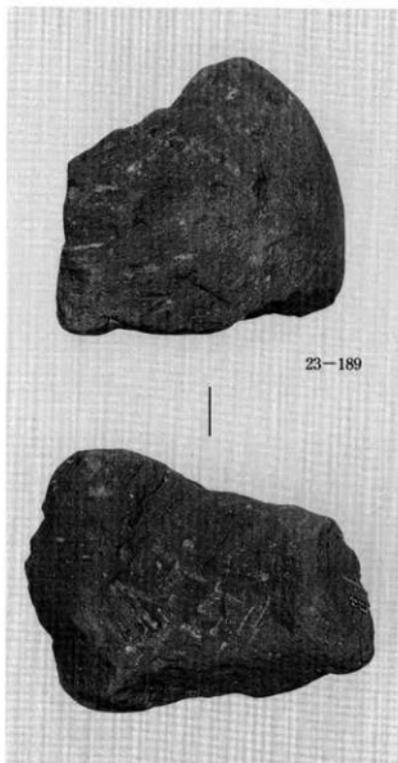
22-186



23-187



23-188



SD030

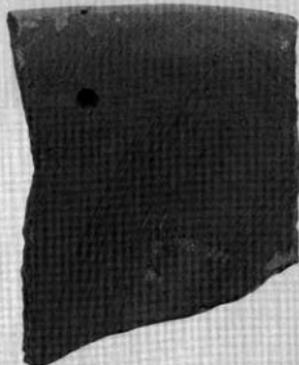


25-6



25-7

SD060



25-15

SK007



26-1



26-2



26-3



26-6

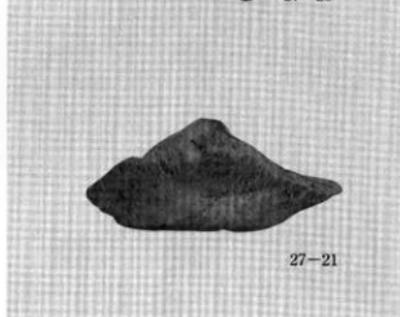
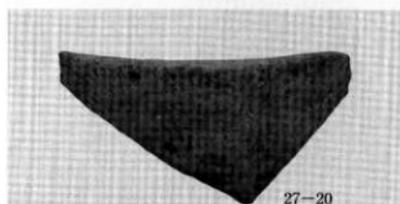
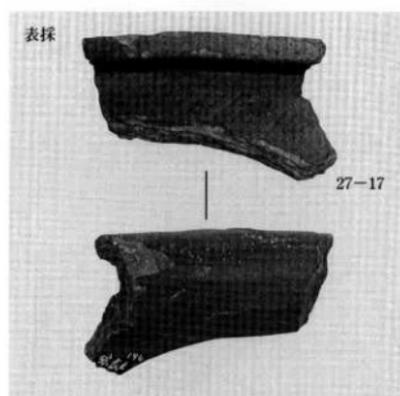
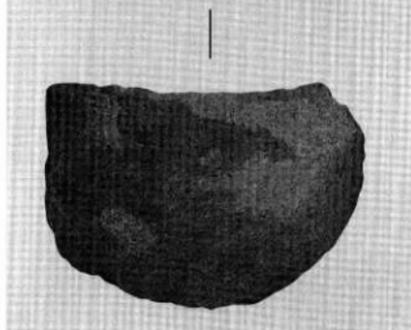
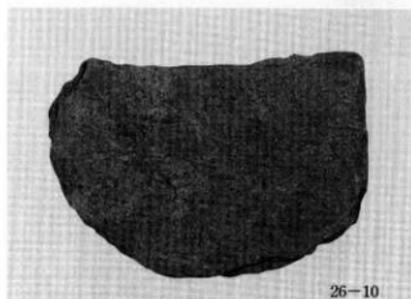
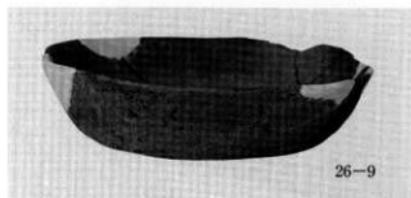
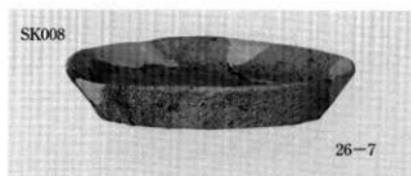


26-5



26-4





長崎坊田遺跡

筑後市文化財調査報告書

第23集

平成11年3月

編集発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 (有)一の瀬印刷

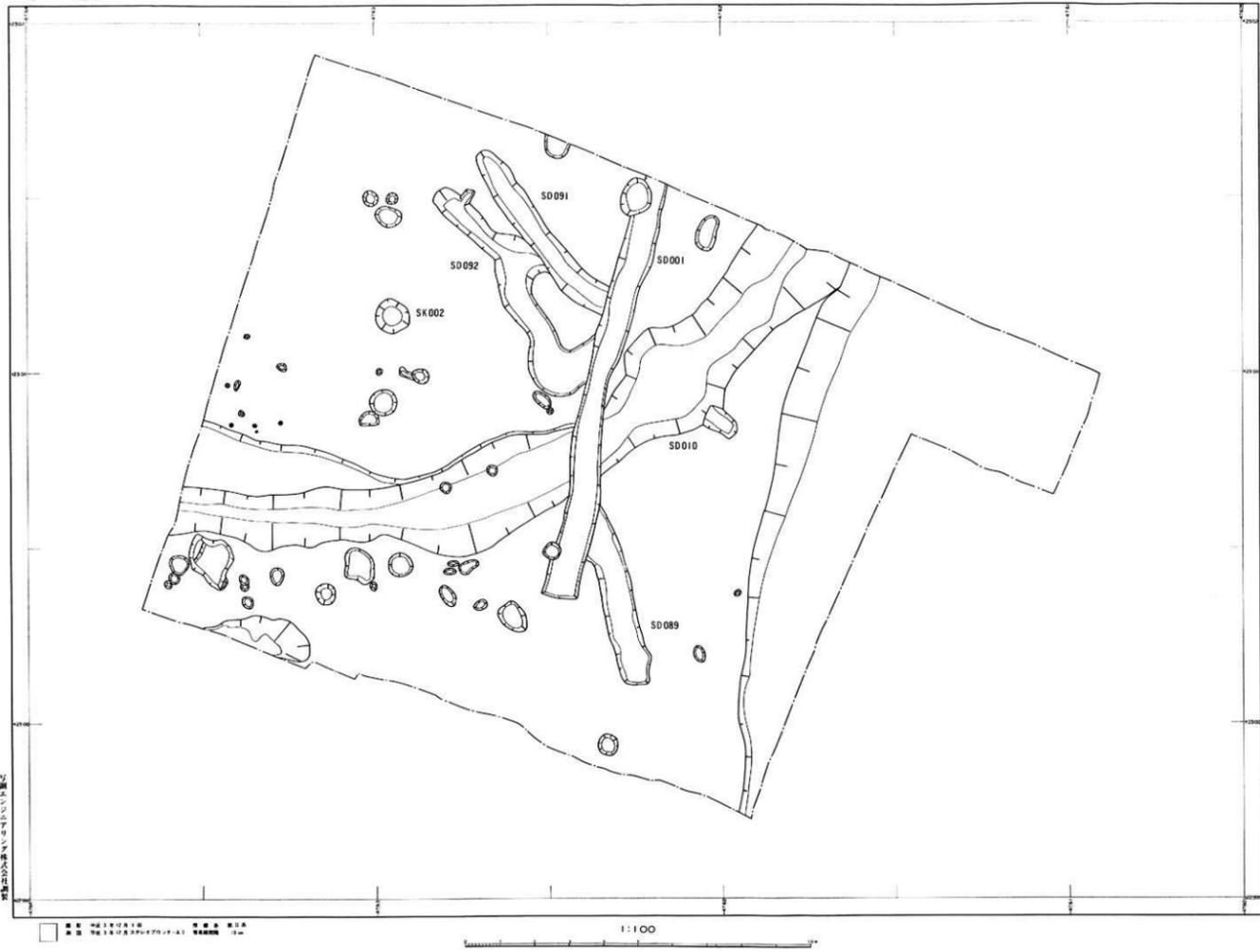
福岡県筑後市大字和泉225番地



付図① 兵後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図 (1/25,000)

1 : 100

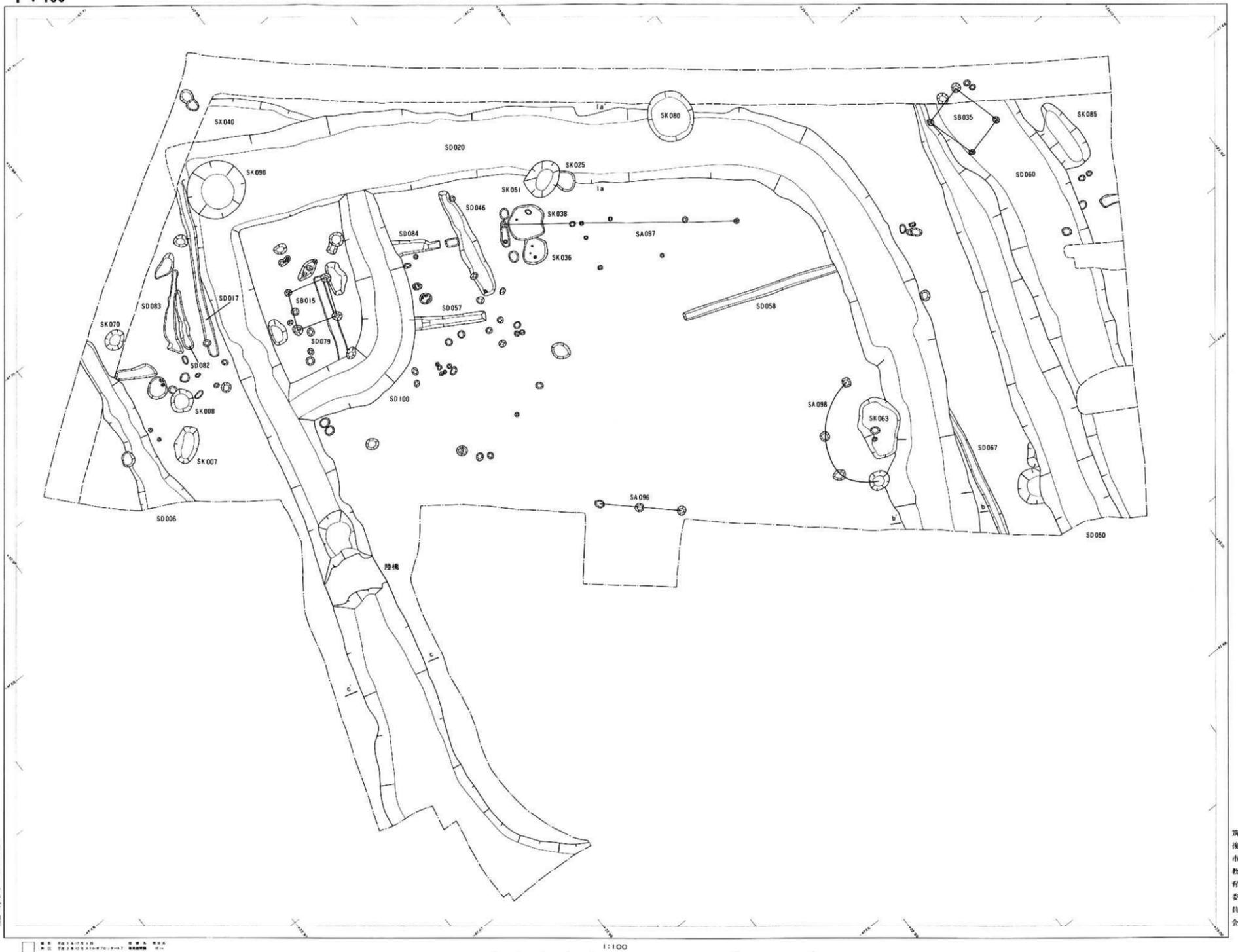
長崎坊田遺跡調査区 A



筑後市教育委員会

1 : 100

長崎坊田遺跡調査区 B



筑後市教育委員会

付図② 長崎坊田遺跡遺構全体図(1/100)